

中世ロシア文学図書館(I) モンゴル・タタールのくびき

三浦清美

Library of Russian Medieval Literature(1)

Kiyoharu MIURA

Abstract

The author in this bulletin provides translations of four literary works, which reflect medieval Russian thoughts in the period of so-called Mongol-Tatar yoke (usually considered from 1238th to 1480th). The first we provide is composed of five sermons of Serapion of Vladimir. They accounted for the cruel aggressions of Mongol-Tatars as a punishment from God and invoked penitence of their contemporary. The second work is "the Tale of Mercury of Smolensk". Mercury was believed to have repulsed single-handed the cloud of Mongol-Tatars from Smolensk. The third is "the Tale of Kitezh". The town of Kitezh was believed to have disappeared during the attack of Mongol-Tatars. The fourth is "the Tale of Assassination of the Prince of Chernigov Michail and His Aristocrat Feodor", who are assassinated because of the refusal of Tatars' customs in their court.

本紀要において、日本ではなじみの薄い中世ロシア文学の作品を、今まで紹介されたことがないものを中心に、連載のかたちで紹介してゆきたいと考えている。この翻訳シリーズを「中世ロシア文学図書館」と名づける。そのゆえんは以下のとおりである。

ロシアでは、ソビエト時代に《Памятники литературы древней Руси》(略称ПЛДР、『中世ロシア文学記念碑』、総編纂Л.А.ドミートリエフ、Д.С.リハチョーフ)という中世文学の選集が刊行されて好評を博し、長らく中世ロシア文学鑑賞、研究の基本文献となっていたが、ソビエト崩壊後、この選集を基礎としてあらたに取り上げる作品を増やし、《Библиотека литературы древней Руси》(略称БЛДР、『中世ロシア文学図書館』、編集Л.А.ドミートリエフ、Д.С.リハチョーフ、А.А.アレクセーエフ、Н.В.ポヌイルコ)という新しい選集の刊行がおこなわれている。

最終的に20巻になる予定の新選集は、12巻本だった前選集に収録されたテキスト、解題、注釈をそのまま継承しつつ、そのほか前選集に掲載されなかった中世ロシア文学の重要な作品を大幅に加えて、2009年11月現在、15巻まで刊行されている。基本的に新選集は、前選集の増補拡大版である。

筆者が本紀要において志す翻訳集は、これらの選集におさめられたテキストを底本とするが、翻訳シリーズの題名は新選集のひそみにならない、「中世ロシア文学図書館」とした。これが日本語として通りがよいかどうかは読者の判断にまかせることにして、ロシアの古典研究では、《Русская историческая библиотека》(略称РИБ、『ロシア歴史図書館』)、《Библиотека русского фольклора》(『ロシア・フォークロア図書館』、モスクワ、「ソビエト・ロシア」)のように、古文庫翻刻集やフォークロアの選集を「…図書館」、あるいは、「…文庫」と称するのは珍しくないことを付記しておきたい。

目次

1. ウラジーミルのセラピオンの説教	
〈解題〉	146
〈翻訳〉	147
2. スモレンスクのメルクリイについての物語	
〈解題〉	152
〈翻訳〉	153
3. キーテジ伝説	
〈解題〉	154
〈翻訳〉	155

4. チェルニーゴフ公ミハイルとその貴族フェオドルの
ハーン宮廷における殺害についての物語

〈解題〉	160
〈翻訳〉	160

本稿において扱うのは、モンゴル・タタールのくびき
がもっとも厳しかった時代（1237-1328年）にそのコ
アになる部分を書かれたと考えられている4つの作品、
『ウラジーミルのセラピオンの説教』、『スモレンスクの
メルクリイに関する話』、『キーテジに関する伝説』、『チ
ェルニーゴフ公ミハイルとその貴族フェオドルのハーン宮
廷における殺害についての物語』である。テキストは
基本的に『中世ロシア文学記念碑 13世紀 Памятники
древней русской литературы XIIIвек.』（モスクワ、
1981）、『中世ロシア文学図書館 第5巻 Библиотека
литературы древней Руси Т.5』（サンクト・ペテル
ブルグ、1997）に拠った。

4つの作品のうち、1、4は14世紀の写本、2は17
世紀の写本、3は18世紀の写本によって伝承されたも
のであるから、現存するテキストはモンゴル・タタール
来寇からかなりあとに書かれたものということになる。
しかしながら、そこにはこの未曾有の国難に生きたロシア
人（北東ルーシ人）たちの精神がいきいきと息づいて
いる。

この作品集のなかから上記4つの作品のみを訳出した
ことに研究上のつよい必然性はなく、訳出する作品を
徐々に増やしていきたいと考えているのであるが、あえ
て4作品の共通点をあげるとすれば、これらが苦難の時
代における中世ロシア人の思考回路をあらわにしている
ことかと思われる。作品を味読すれば、モンゴル・タタ
ール勢力の過酷な支配のなかで、ロシア人が何をどう考
えたのか、切実に願ったものはどんなことだったのか
が伝わってくるのではないだろうか。それを簡潔に示せば
次のようになる。

南ロシアのキエフを中心として発達した最初のロシア
国家は、しばしば異民族の侵略に苦しんだ。キエフ国家
の建設以来、ペチェネグ人、ポーロヴェツ人、そして、
モンゴル人がルーシを襲った。中世ロシア人、ことに書
き言葉を支配した教会人にとって、騎馬民族の来寇は自
らの罪深さに対して神があたえた懲罰にほかならなかつ
た。彼らの認識にあつては、己らの罪深さのゆえにこれ
を悔い改めさせるため、神は爆発的な破壊力のある騎馬
民族（モンゴル人）を遣わしたのである。

筆者の見解によれば、これを期に13世紀後半、ロシ
ア正教会（コンスタンチノーブル教会キエフ府主教座）
では教会刷新運動が起きる¹。この運動は、次の時代に
モンゴル・タタールのくびきをうちやぶるモスクワ公国
の勃興とも無関係ではないと筆者は考えるのだが、詳論

は別の機会にゆずる。

(1) 「ウラジーミルのセラピオンの説教(I)～(V)」²

〈解題〉

セラピオンは13世紀後半に活躍したキリスト教正教
の宗教者で、モンゴル・タタールのくびきももっとも厳
しかったこの時代、誠実で熱のこもった説教によって同
時代人を鼓舞した。『ヴォスクレセンスカヤ年代記』に
よれば、セラピオンはキエフ・ベチェルスキ修道院の
修道院長Архимандритであったが、1274年、この時代
の傑出した宗教指導者であるキエフ府主教キリル3世に
連れられて北東ルーシに来着し、ウラジーミル、スーズ
ダリ、ニジェゴロドの主教に叙聖された³。しかしながら、
翌1275年7月12日に逝去し、ウラジーミルのウスペン
スキ聖堂に埋葬された。彼の名前は諸年代記にはまれ
にしか現われないが、困難な生活状況のなかで人々を鼓
舞した人物として、民衆のあいだでは19世紀にいたる
まで崇敬された。

5つの「説教」が確実に彼のものとされており、間
接的な情報によってかなり正確に執筆年代を求めること
ができる。たとえば、1230年5月3日に地震があり、人々
が神の怒りの現われであると畏れたことが、諸年代記
（たとえば、『ノヴゴロド第1年代記』⁴、『ソフィア第1
年代記』⁵、『ヴォスクレセンスカヤ年代記』⁶、『ニコ
ン年代記』⁷、『アヴラムカ年代記』⁸など）に言及されて
いるが、これらの記述から、地震の惨禍について触れられ
た第一の説教は、1230年ころに書かれたと考えられて
いる。一方、そのほかの説教に関しては、その注釈者で
あるサンクト・ペテルブルグ国立大学文学部教授で言語学
者のB.B.コーレソフは死の2、3年前のものであると
考えている。

テキストの異同や相互の重複などがあるものの、これ
らの説教の主題は明らかである。人生のめぐり合わせに
よってモンゴル・タタール来寇の目撃者となったセラピ
オンは、苦々しい思いで大量虐殺のあと生き残った者た
ちの道徳的退廃を直視し、異民族の征服下におかれた民
衆の精神的浄化のために戦ったのである。セラピオンは、
征服者たちに対する評価に見られるように、客観的でえ
こひいきがなく、また、公正であり、自分の同時代人た
ちを非難するだけではなく、その勇気ある振る舞いに対
してはしかるべく評価している。そのうえ、たとえば、
ルーシにおける異教残滓に関する考察に現われたように
ほどよく寛大でもあった。

コーレソフの言葉にしたがえば、セラピオンは「伝統
的な意味合いにおけるルーシの愛国者」だった。彼は自
らの説教をとおして、ルーシのもっとも困難な時代にロ
シアの愛国主義を促したのである。ことにセラピオンは

ルーシを解体させた分領諸公の内紛には厳しい態度で臨み、その庇護にあたった府主教キリルと同じように、彼らの分別のなさをたしなめ、高い道義的な清らかさを要求した。この時代に生きた数少ない知識人の一人として、彼はバトゥによる壊滅のあとの時代における、ルーシの歴史的使命をよく自覚していたのである。その歴史的使命を担って、セラピオンの後の時代に台頭してきたのがモスクワ公国にほかならない。

自らの作品においてセラピオンが援用するのは、キリスト教聖職者がよく用いた書物の知識だけではない（彼が聖書から引用するのは、広く知られた、耳目をひく警句だけである）。彼は民衆の文学（物語や聖書外典）や、場合によってはこの当時広まっていた風聞や口づたえの噂話に拠ったりして、自らの作品と同時代のもっとも重要な事件とを結びつけた。彼は叙述に心理的な陰影をたくみにほどこしたり、生き生きとした比喩を盛り込んだりして、自らの創造的個性をテキストに持込んだ。

セラピオンの「説教（スローヴォ）」は声を出して読み上げられたのであり、黙読されたのではなかった。このゆえにこれら説教はダイナミックであざやかでリズム感に富む。作者は広範にルーシの口語を用いながら、聴衆のために引用では教会スラヴ語をも使ったのである。概して、その言語は非常に古風であるが、これは13世紀に特徴的なことである。

〈翻訳〉

われらが聖なる師父セラピオンの説教I

兄弟たちよ、そなたたちは福音書のなかで主がこうおっしゃっているのを聞いているか。「近いうちに、太陽や月や星に徴が現われ、大地がいたるところで震えるだろう。飢餓に襲われるだろう⁹」、と。このときわれらの主がおっしゃったことが、私たちの時代に、今現在の人々のもとで実現してしまった。なんとたびたび私たちは太陽が死に、月の光が弱り、星が位置を変える¹⁰のを見たことか。そして、いま、地震が起こった¹¹のを私たちは自らの目を見た。天地創造のころから確固として揺るぎないものであった大地が、いま神の命令によって動いたのだ。私たちの罪によって揺すぶられたのだ。私たちの無法な振る舞いをこれ以上持ちこたえることができないのだ。

私たちは福音書に書かれていることにしたがわなかった。私たちは使徒が言われることにしたがわなかった。預言者たちのおっしゃることにしたがわなかった。これら偉大なる主教たちのおっしゃることにしたがわなかった。私はこれら偉大なる主教たちとして、バシレウス、神学者グレゴリオス、金口イオアンネス¹²、そのほかの人々の名前を挙げよう。この人々のおかげをもって信仰は堅固なものとなり、異端者たちは追放され、神があら

ゆる民族の知るところとなったのだ。彼らは絶えまなく私たちが教え導いている。しかるに、私たちだけが無法のままとどまっている。見よ、神は徴によって、神のご命令で揺れ動く大地によって、私たちが懲らしめたのだ。口では何も語らないが、行いによって罰したのである。あらゆることによって私たちが懲罰したが、私たちに悪行をやめさせることはお出来にならなかった。いま神は大地を揺すり、動かし、樹木から葉を振りはらうように、地上から無法による多くの罪を振りおとそうとしている。

こういう者もいるかもしれない。「この地震の以前にも、戦はあったし、火事もあった」と。私はこのように言おう。「そうにちがいないが、そのあと私たちの身に何が起こったか。飢餓ではないか。疫病ではないか。多くの戦ではないか¹³。にもかかわらず、私たちは悔い改めなかったのだ。だから、無慈悲な民が私たちが襲ったのである。それは神が放ったのである。私たちの国は荒廃し、私たちの町々は征服され、聖なる教会は蹂躪され、私たちの師父や兄弟たちは殺され、私たちの母や姉妹たちは陵辱されたのだ」と。

さあ、兄弟たちよ、いまこそこのことをよくよく肝に銘じ、この恐ろしい罰に恐れおののき、自らの主の足もとにひれ伏して、告解しようではないか。これ以上大きな神の怒りが私たちが襲わないように、と。これまでのものより厳しい処断が私たちの身におよばないように、と。神はもうあと少しだけ私たちの悔い改めを待ってくれる。少しだけ私たちの改心を待ってくれる。もしも私たちがけがらわしい情け容赦のない裁きをしないと誓うならば。もしも私たちが心を改め、不正な高利貸し、あらゆる強奪、窃盗、劫掠、汚らしい不義密通から足を洗い、神から見捨てられることがないならば。罵詈雑言、嘘、誹謗、呪詛、中傷、そのほかの悪魔的な振る舞いをやめるならば。心を改めてこういったことをやめるならば。私は知っている。祝福された者たちは、現世ばかりではなく来世でも私たちが受け入れてくださるだろうということ。なぜなら、主ご自身がこうおっしゃったからである。「立ち帰れ、わたしに。そうすれば、私もあなたたちに立ち帰る¹⁴。あらゆる者たちから遠ざかれ。わたしもおまえたちを罰しながら遠ざかる。」

いつまで私たちは私たちの罪から逃れられずにいるのか。自らと自らの子供たちを憐れもうではないか。突然の死がこれほどたくさんあった時代はあるだろうか。自らの一家に平安をもたらすことができないうちに誘拐された者がいるかと思うと、晩に元気に床についたのに朝起きることができなかつた者もいる。私はあなたがたにお願いする。このような突然の別れを心底恐ろしいと思おうではないか。

もしも私たちが主の御心に委ねられるならば、天の神は、私たちが息子のように憐れみ、あらゆる慰めによつ

て慰め、私たちから地上の悲しみを拭い去ってくださり、この世からあの世に安らかに旅立つことを許してください。あの世で私たちは、神に仕えるのがふさわしい者たちとともに、かぎりない歓喜と愉悅を味わうことだろう。兄弟たちよ、子供たちよ、私はたくさんのお話を話したが、これを受け入れ、私たちの教誨によって行いを改める者はわずかであろう。不死を夢見るかのように、多くの者たちが自分のことがいわれているのだと気づかないだろう。

私は恐れる。この者たちについて主が仰せられた言葉が実現するのではないかと。すなわち、「わたしが来て彼らに話さなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが、いまは、彼らは自分の罪について弁解の余地がない¹⁵。」私はたくさんのお話をあなたに言う。もしも悔い改めなければ、神のまえで弁解の余地はないであろう。なぜなら、私、罪深いあなたがたの牧夫は、主に命ぜられたことをおこなった。主の言葉をあなたがたに伝える。あなたがたは主の賜物をいかに増やすかを知っているのではないか。主が世界を裁き、あらゆる者たちにその行いによって報いをあたえるためにいらっしゃるとき、そのときこそ、主はあなたがたからその答えを要求されるだろう。あなたがたが自らににあたえられたお金(タラント)を増やすことができたなら¹⁶、主は自らの父の誉れにおいて聖霊とともにあなたがたを讃えられるだろう。いまも絶え間なく永遠に。

至聖なるセラピオンの説教II

子供たちよ、私はあなたがたゆえに自らの心のなかに大きな悲しみをもっている。なぜなら、あなたがたは何としても好ましからざる所業をやめようとしなからである。病に苦しむわが子を見る母親がわが子を思って嘆き悲しんだとしても、それは、あなたがたの罪深い父である私が、あなたがたの無法な振る舞いゆえに、あなたがた自身が苛まれるのを見て嘆き悲しむほどではあるまい。わたしは何度も何度も、あなたがたが邪悪ならわしをやめるように言ってきた。だが、あなたたちがいっそうに悔い改めないことを私は見る。

あなたがたの誰かが強盗であるなら、略奪をやめようとしな。あなたがたの誰かが盗人であるなら、窃盗をやめようとしな。あなたがたの誰かがほかの誰かを憎むなら、倦むことなく敵対する。あなたがたの誰かが侮辱し劫略するなら、飽くことを知らない。あなたがたの誰かが高利貸しなら、利子を取ることをやめな。なぜなら、預言者は言っているからである。「無益に駆けずり回っている。金をかき集めるが、誰のためにかき集めているか、自分でもわからない。」呪われた者は考える。裸で生まれてきたのだから、裸でこの世をおさらばするだろう。何ももたずに、永遠の呪いだけを携えて。

もしも誰かが姦通者であるなら、不義密通をやめず、口汚く罵る者も酔っ払いも自らの習慣をあらためない。あなたがたが神に見放されるのを見て、私はどうやって心を慰めたらよいのだろう。どうやって喜びを覚えたらよいのだろう。私はいつもあなたがたの心の畑に神々しい種子を蒔いてきたというのに、それが生い育って実を結ぶのを見たためしがない。

兄弟たちよ、息子たちよ、私はあなたがたにお願いする。より良きほうに変われ。良き悔い改めによって悔い改めよ。悪しき行いをやめよ。私たちをお創りになった神を恐れよ。神の恐ろしき審判に震え懼れ。この世を去るとき、私たちは誰にむかって歩いてゆくというのか。誰に向かって近づいていくというのか。誰に言葉をかけるのか。誰に答えるというのか。子供たちよ、神の怒りに触れることは恐ろしい。

このような生き方をしていればどんなことが私たちの身に振りかかるのかと、どうして私たちは考えようとしな。私たちはわが身に何を引き寄せようとしていたのか。私たちは神からいかなる罰を受けたのか。私たちの国は捕囚にあつたではないか。私たちの町々は征服されたではないか。私たちの父や兄弟たちは死体となって地に倒れ伏したではないか。私たちの妻や子らは虜に取られたではないか。私たちは異教徒たちの手でつらい労働に駆り出され、奴隷として酷使されたではないか。

受難と苦患の歳月がかれこれ40年になろうとしている¹⁷。わたしたちには絶え間なく重い貢税が課され、飢えに苦しみ、家畜たちは疫病に冒され、お腹いっぱいパンを食べることもできない。私たちの呻きと悲しみは私たちの骨の髄まで達している。誰が私たちをこのような目に遭わせたのか。私たちの無法と私たちの罪である。私たちの不服従である。私たちの不遜である。

兄弟たちよ、私はあなたがたのひとり一人にお願いする。あなたがたの思いを深く究明せよ。心の目であなたがたの振る舞いを見よ。かつそれを憎め。拒め。悔い改めよ。神の怒りは止むだろう。主の慈しみは私たちに降り注ぐだろう。私たちは私たちのこの地上で歓喜につつまれるだろう。この世を旅立ったあとは、子らが父のもとに赴くように、喜びいさんと神の御許に参り、天上の王国を受け継ぐだろう。私たちはこの天上の王国のために主によって創造されたのである。主は私たちを偉大なものとして創造してくださったのに、私たちは不服従によって卑小に創り変えられたのである。

兄弟たちよ、私たちの偉大さを台無しにするのはやめようではないか。「神の御前で正しいのは、おきてに従う者ではない。それを行う者である。」私たちが何か過ちを犯したとしても、ただちに告解に駈つけよう。神への愛をいだきつづけよう。改悛の涙を流そう。あたくさぎり乞食たちに施しをしよう。貧しい者たちに救いの

手を差し伸べよう。そうすれば、不幸を免れることができるだろう。もしもそうでないならば、神の怒りが私たちを見舞う。いつも愛のなかにくるまれていれば、平穩無事に過ごすことができる。

私たちはニネヴェ¹⁸の町のことを知っている。多くの人々が住む巨大な町であったが、無法に満ち溢れていた。神はソドムとゴモラ¹⁹のようにこの町を根絶やしにしようとなさって、預言者ヨナ²⁰を遣わし、町の滅亡を預言させた。彼らはこれを聞き、即刻ただちに自らの罪を悔い改め、それぞれが悪しき道から正道にもどり、老いも若きも改悛と齋戒、祈り、啼泣によって無法を根絶した。それは赤ん坊にさえおよんだ。赤ん坊でさえ三日間ミルクを飲まなかった。それは家畜にまでおよんだ。馬もあらゆる家畜も潔斎した。そして、主に祈りを捧げ、主からの懲罰を逃れ、神の激しい怒りを慈悲に変えて破滅から免れたのである。

ヨナの預言はむなしなものとなった。このためにヨナは、不名誉にも自らの預言が成就しなかったことについて神に不満をいだいた。町は破滅しなかった。ヨナは人間として町の破滅を待ち望んでいた。だが、神は彼らの心のなかを覗きこみ、彼らが真実に改悛し、行いも思いも自らの悪から遠ざかったことを見てとると、心貧しき者たちに慈悲をほどこした。

私たちはこのことに対して何を言うだろう。私たちは何を見ていなかったか。私たちの身に降りかからなかった禍があるか。私たちを罰する手立てで主がお使いにならなかったものがあるか。主は私たちを私たちの無法から救い出そうとなさったのだ。ひと夏たりとも、ひと冬たりとも、神が私たちを罰することなく過ぎたためしがあったらどうか。それでも、私たちは私たちの陋劣な習慣をやめようとはしなかった。誰がどんな罪のなかにいたか。罪のなかで暮らしていたのだ。誰も悔い改めをしようとさえしなかった。誰も神に悪をなしませんと心から誓う者がいなかった。

この世で、そして、来たる世のけっして消えることのない紅蓮の炎のなかで、私たちが身に引き受けることのない懲罰があるか。だから、いまこそ、神を怒らせることをやめようではないか。私は願う。あなたがたのなかで多くの者たちが神に心から仕えたが、この地上においては罪人どもとともに神によって罰された。だが、正しき者たちはそのゆえに主からいっそう輝かしい桂冠を授けられ、罪人たちはおのが無法のために義人たちが罰されたがゆえに、いっそう厳しい責め苦に苛まれるのである。

このことを聞いて恐れるがよい。恐れおののくがよい。悪から離れ、善を行なうがよい。主ご自身がおっしゃっている。「立ち帰れ、わたしに。そうすれば、私もあなたたちに立ち帰る。」主は私たちの改心を待たれている。

私たちを憐れもうとなさっている。私たちを禍から救い出そうとなされている。悪から救済しようとなされている。私たちはダビデとともにこう言おう。「主よ、私たちの謙虚さをご覧になってください、私たちのすべての罪をお許してください。私たちをお導きください。神よ。われらが救い主よ。自らの激しい怒りを私たちに向けないでください。私たちを永遠に怒りつづけることがありますように。自らの怒りを世代から世代へと押しひろげることがありますように。あなたは天上の神なのですから。私たちは、永遠なる父と聖霊とともにいまも絶え間なく永遠に、あなたを誉めたてまつります。

セラピオンの説教 III

兄弟たちよ、私たちの神の人間に対する愛に私たちは驚いている。神はいかにして私たちを自らのもとの導こうとしているのだろうか。いかなる言葉によって、私たちが教え導こうとしているのか。いかなる威しによって私たちを制止したのか。しかしながら、私たちは決して神に向き合おうとはしなかった。

私たちの無法がいや増しに増すのをご覧になって、私たちがその尊い教えを覆すのを目になさって、神は多くの徴をお示しになり、たくさんの恐怖を放たれ、自らの僕によって多くのことを教えようとなされた。しかし、いかにしても私たちに教え導くことはできなかった。そこで、私たちに無慈悲な民を差し向けた。酷烈な民を。若者たちの美しさをも、老いたる者の無力さをも、子供たちの幼さをも容赦しない、酷烈な民を。

私たちは、ダビデが「主の怒りはまたたくまに燃え上がる²¹」とおっしゃているように、われらが神の激しい怒りをわが身に招き寄せたのだ。神の教会が打ち壊され、聖別された器と神聖なる十字架と聖なる書物が陵辱され、聖なる場所は踏みつけられ、聖職者たちは剣の餌食となり、至聖なる修道士たちの遺骸は鳥のついでに任され、われらが師父たちと兄弟たちの血はあたかも水のごとく地面にあふれ、私たちの公とその軍勢は消え、私たちの戦士たちは恐怖のあまり逃亡し、多くの兄弟たちや子供たちが虜に取られ、多くの町々が灰燼に帰し、私たちの村々は雑草が生い茂り、私たちの偉大さは露と消え、私たちの美しさは毀れ、私たちの富は敵に分捕られ、私たちの労働の成果は異教徒たちの財産となり、私たちの国は異教徒たちの支配に落ちた。私たちは私たちの国に寄食する者たちによって恥辱にまみれ、私たちの敵たちによって嘲笑された。なぜなら、雨が空から降り注ぐように主の怒りが降りたからである。

私たちは神の怒りをわが身に引き寄せ、神の大いなる慈愛から背をそむけた。神が慈悲深い目で私たちを見守ってくださるよう努めようとしなかった。罰はなかった。それは私たちを避けてとおった。だが、いまや私た

ちは絶え間なく懲罰にさらされている。私たちは主に向き合おうとしなかった。私たちの罪を悔い改めなかった。自らの邪悪な風習を放棄しようとしなかった。罪深い汚らわしさから身を清めようとしなかった。私たちは私たちの国全土に襲いかかる罰を忘れていた。私たちは卑小な存在なのに、自らを偉大なものであると錯覚したのだ。

このゆえに私たちのひどい苦しみには終わりが無いのである。羨望が増し、悪意が私たちをたやすく絡めとり、虚栄が私たちの理性を霧消させ、近い者への憎悪が私たちの心に巣食っている。飽くことのない貪欲ゆえに私たちは奴隷と化した。貪欲ゆえに孤児たちに慈悲をかけることもなければ、人間のよき本性に目覚めることもなく、ただ飢えた野獣が肉をむさぼり食らうように、私たちは飢え、すべての者たちを殺そうとしている。この悲しい血にまみれた財産を略奪して自らのものにしようと余念がない。野獣は食べ終われば満腹するが、私たちは決して飽くことがない。一つを得れば、別のものを欲しがる。心正しい富のゆえに神が私たちを怒ることはないが、預言者はこう言っている。「主が天から見下ろし、神を知ろうとしている者はいないか、神をもとめている者はいないかと探してみたが、みんないっしょに道を踏みはずしていた。」また、次のように言っている。「無法をして私たちの民をパンの代わりに食べている者たちは、おのれの振る舞いの意味がわかっているのだろうか。」使徒パウロは休むことなく叫び声を上げてこう言っている。「兄弟たちよ、邪悪な暗いことに手を染めるな。なぜなら、高利貸しと強盗は偶像に奉仕する者たちと同じように裁きを受けるからである。」神はモイセイに言っている。「もしも孤児たちや寡婦たちに悪をなし、彼らが私に叫び声をあげて訴えた場合、私は彼らの訴えの叫びを聞いて激しい怒りに燃え、おまえたちを剣で打ち倒すであろう。」

そして、私たちについて言われたことが今実現しているのである。私たちは剣によって倒れなかったであろうか。一度ならず、二度までも。私たちを苦患に陥れる者たちが悪をなすことをやめさせるには、私たちは何をすればよいのだろうか。聖なる書物に書かれたことを、誠実に心に留めるがよい。私たちの主、御自らが大切な教えをお示しになっている。いわく、たがいに愛し合いなさい。あらゆる人間に慈悲の心をもちなさい。自らの隣人を自らを愛するように愛しなさい、自らの身体を清浄に保ちなさい、身体を汚してはならない。もしも汚してしまったなら、懺悔によって清めなさい。傲りたかぶってはならない。悪に悪を返してはならない。実に、主なる神は、私たちが物忘れが早いゆえに、私たちを憎んでいるからである。私たちは何を言うことができるだろうか。「われらが父よ、私たちの罪を清めたまえ」である

う。たが、私たち自身が許しの心をもっていない。聖書には、「あなたがたは自分の量る秤で量り与えられる²²」と書かれている。私たちの神に栄えあれ。

セラピオンの説教 IV

子供たちよ、あなたがたの愛を見、取るに足らない私たちに服従するのを見て、私があなたがたのために喜んだのはつかの間だった。私はあなたがたがすでにしっかりと地に足をつけ、喜びをもって聖書の言葉を受け入れているのだと思っていた。聖書には、「不敬なる者たちの集まりに出かけてはならぬ、破滅をもたらす者たちの玉座についてはならぬ」とある。だが、あなたたちはまだ異教の風習にとどまっている。魔法を信じ、無辜の人々を炎で焼き、共同体と町全体に殺害をもたらした。もしも誰かが殺人に関与していなかったとしても、同じ共同体にあって心のなかでそれに同意しているのだから、自分自身が殺しをおこなったのと同じである。また、助けることが出来たのに助けなかったのならば、自分自身が殺人を命じたのと同じである。

いかなる本や書物から、魔術のために地上に飢饉が来るとか、魔術によって穀物の収穫が増えると聞き知ったのか。もしもそれを信じるなら、なぜそのとき彼らを燃やすのか。あなたがたは魔術師たちに祈り、彼らを崇拜し、彼らに捧げ物を持ち寄っている。共同体を統治させ、雨を降らせたり、暖かい気候をもたらしたり、大地に実りをもたらすように祈らせている。おかげでこの3年、ルーシだけではなくラテンの地²³でも凶作に襲われている²⁴。見よ、これは魔術師たちが仕組んだことではないのか。神はその罪のゆえに私たちに罰を加えながら、自らの被造物を自らのお気に召すように治められるのではないのか。

私は聖なる書物によって、魔法使いや魔女たちが悪魔どもの力によって人間や家畜に影響をおよぼし、その生死を左右できることを知った。信じている者たちに作用がおよぶのである。神がお認めになるなら、悪魔たちは作用をおよぼす。神は、悪魔どもを恐れる者たちだけに、悪魔どもが作用をおよぼすことをお許しになるのである。神への信仰を堅く保つ者には、魔法使いは力をおよぼさない。私はあなたがたが理性のないことを悲しむ。あなたがたにお願いする。異教の振る舞いをやめなさい。

もしもあなたがたが町から無法な人々を追い出そうとするなら、私はこれを喜ぶ。清めなさい。預言者であり、王であったダビデが、エルサレムの町から無法をおこなうあらゆる人々を根絶やしにしたように。ある者たちは殺し、ある者たちは追放し、ある者たちは投獄した。彼はいつも神の町を罪から清めていた²⁵。あなたがたの誰がダビデのような裁き手になるのか。ダビデは神への畏怖によって裁き、聖霊によって見、真実にしたがって答

えた。一方、あなたがたは自身が情欲にあふれているのに、どうして死刑の判決を下すことが出来るのか。そうだ。あなたがたは真実をもって裁いていない。敵意によってこれをおこなうものもいれば、見苦しい実入りをむさぼる者もいれば、知恵の足りない者もいる。ただ殺したいだけ、ただ掠め取りたいだけで、誰を、何を殺したがつているのか、本人もわからない。

神の掟は、一人の人間に死刑を宣告するのには、多くの証人が必要だと定めている。しかるに、あなたがたは、水が証だてることによって裁こうとして、こう言っている。「もしも沈みはじめたら無罪だ、浮いたときにはこいつは魔法使いなのだ」、と。悪魔たちが、あなたがたに信仰がないのを見て、沈まないように彼の身を支え、あなたがたを魂の破滅へと引きずりこもうとするのではないのか。どうしてあなたがたは、神が創造なさった人間の証言に耳を傾けず、水という魂のない自然に向かって証言を得ようとして神の怒りを買っているのか。

あなたがたは、太古の昔から神がこの地上に送られた懲罰のことを聞いたことがあるだろう。洪水の以前には、巨人たちに炎が見舞い²⁶、洪水のときには水が襲い、ソドムには硫黄の火が降り、ファラオには10の懲罰がくだり、カナン²⁷の地ではスズメバチ²⁷が襲い、空から炎の石が落ちた。士師のときには戦争を、ダビデの時代には疫病を、ティトゥス²⁸の時代には虜囚を、その後は地震や雹を、神は送られた²⁹。

私たちの民族の時代に、私たちが見なかったものがあつたというのか。戦、飢餓、疫病、地震、そして、最後には異教徒の手にわたされ、ある者は死に、ある者は囚われの身となり、ある者は過酷な労役につかされた。見よ、これらは神の御心で起こったことなのだ。われらを救済するために神が遣わしたことなのだ。いま、私はお願いする。かつての破廉恥を悔い改め、今からは風に揺れ騒ぐ葦になってはいけない。

しかし、人間のこしらえた作り話を聞くくらいなら、聖なる書物に向かうがよい。私たちの敵である悪魔たちが私たちの理性、私たちの堅固な魂を見て、私たちに罪を犯させることなく、恥をかきどこかに消えてしまうように。なぜなら、私は大いなる愛を抱いて教会に通い、敬虔にそこに立つあなたがたを見るのだから。それ以上に、もしも私があなたがたひとり一人の心と魂に、神の理性を授けることができたのなら、どんなによいことだろう。

あなたがたを教え、納得させ、導きながら、私が疲れてしまわないように。もしもあなたがたがこのような生活を受け入れ、神の光を見ないのならば、少なからぬ怒りが私を押し潰してしまうだろうから。羊たちが狼に襲われるのを見て、牧夫は心穏やかでいることはできないからである。邪悪な狼である悪魔があなたがたの誰かを

殺しているとき、私はどうして心穏やかでいることができようか。だが、あなたがたはあなたがたを救いたいという私の愛を思い起こし、私たちみなを創造した神のお気に召すように努めるがよい。神こそ、あらゆる誉れと崇敬に値するものである。

V. 至聖なるセラピオンの信仰の欠如に関する講話

子供たちよ、私たちはあなたがたについて心中深い悲しみをもっている。あなたがたは自らの邪悪な風習をやめようとせず、神を憎んであらゆる悪を行い、自らの魂を破滅させようとしている。真実を退け、愛をもたず、羨望と阿諛追従があなたがたのなかで花開き、あなたがたの理性は傲慢になっている。異教の風習をとりおこなっている。魔法使いたちを信じて炎で無辜の人々を焼き殺している。人間が収穫や飢餓に対して何とかしたり、雨を降らせたり、温暖な気候をもたらしたりできると、聖書のどこに書いてあるというのか。

おお、なんとばかばかしいことか。こうしたすべてのことは、自らのお気に召すように神がなさるのである。災難や飢饉は私たちの罪のために私たちに罰し、私たちに改悔させようと神が送られる。おお、不信心な者たちよ、あなたがたは神の懲罰のことを聞いていないのか。洪水以前の太古の昔には、巨人たちは炎で焼きつくされ³⁰、ソドムは硫黄の火で焼かれ、ファラオの時代にはエジプトで10の懲罰がくだり、カナン³¹の地では空から炎の石が降り、士師たちの時代には戦さがおこり、ダビデの時代には人々に疫病がおそい、ティトゥスの時代にはエルサレムが征服され³¹、そのあとの時代には、地震と雹に見舞われた。そして、私たちの時代に経験しなかった禍があるのか。だが、私たちが何としても私たちの邪悪な習慣をやめようとしないのである。

今、神の怒りを見て、あなたがたは考える。首吊りをして死んだ者や溺れ死んだ者を埋葬したが、自分自身が苦しまないように、もう一度掘り返そうと³²。なんとというでたらめだ。おお、なんとという不信心なのだ。私たちはこれほどまで悪にどっぷり浸かっているのに、それを悔い改めようとはしないのだ。

ノアの時代に洪水が起こったのは、首を括って死んだ者のためでも、溺れ死んだ者のためでもない。人間の不正のためである。ほかの数知れぬ多くの罰もそうである。ドゥラツツォ³³の町は建設されて4年の歳月がたったが、海に飲み込まれ、今は海のなかにある。ポーランドでも大雨のために600人の人々が溺れ死んだ。ペレムイシリという町では、200人が溺れ死んだ。4年間も凶作がつづいている。これらすべては私たちの時代の、私たちの罪のためである。

おお、人間たちよ。これであなたがたも悔い改めようとするか。溺れ死んだ者や首吊りで死んだ者たちの墓を

暴いたことについて、神に許しを乞おうか。赦しを請うことで、神の懲罰を和らげるか。兄弟たちよ、悪から退き、あらゆる悪行をやめるがよい。強盗、略奪、酩酊、姦通、吝嗇、高利貸し、侮辱、窃盗、偽証、怒りと憤怒、執念深さ、嘘、中傷をやめるがよい。

私の子供たちよ、罪深いこの私はいつもあなたがたを教導き、あなたがたに悔い改めるように命じてきた。だが、あなたたちは悪行をやめなかった。そして、いかなる懲罰が神から下されようとも、私たちは迷信を広めていっそう神を怒らせた。このために旱魃が起こるのだ。このために大雨が降るのだ。このために穀物が育たないのだ。自分たちこそ神が創られたものであるとわがもの顔でのし歩きながら、どうして自分たちのでたらめさを悲しもうとしないのか。

神の言葉を知らぬ異教徒たちでさえ、自分たちと信仰を同じくする者たちを殺しはしない。略奪もしなければ、非難も中傷も盗みもしなければ、他人のものを羨望の眼差しで見ることもしない。どんな異教の輩も自分の兄弟を売ったりしないし、誰かに災難がふりかかれば、身代金を払って身柄を請けだしてやる。商売であがった利益はみんなに隠さない。

だが、私たちは自らを正教徒であると見なし、神の名において洗礼を受け、神の教えを知っているのに、いつも不正にまみれている。羨望、無慈悲に染まっている。私たちは自らの兄弟を略奪し、殺害し、異教徒たちに売っている。密告で、羨望で、できることなら、たがいに食い合いたいと思う。だが、神はすべての人を守ってくださる。

貴顕もふつうの人間も、それぞれが利益を望み、誰かを傷つけたとしても、それを追い求めている。呪われた者よ、あなたは誰を食べようというのか。あなた自身と同じ人間ではないか。彼は獣でもなければ、異教徒でもない。なぜあなたは自分自身に啼泣と呪詛を引き寄せようとするのか。それとも、あなたは不死であるともいうのか。それとも、神の審判を、それぞれの行いによってそれぞれに報いがくだる神の審判をまぬがれるともいうのか。

眠りから覚めて祈りに心を向けようとせず、だれにどうやって悪事を働くか、だれにどうやって嘘をついて出し抜くかを考える。あなたがたがこうしたことをやめないならば、あとになってもっとつらい災難があなたを襲うだろう。このゆえに私はあなたがたに懇願する。私たちはみな心から悔い改めよう。そうすれば、神は自らの怒りを解くだろう。あらゆる悪行から身を背けよう。そうすれば、主なる神は私たちのもとに戻ってこられるだろう。見よ、私は知っている。だから、あなたがたに教える。私の罪ゆえにこうした禍が起こっているのだと、わたしとともに懺悔におもむき、神とともに祈ろうでは

ないか。なぜなら、私は知っているからである。私たちが悔い改めれば、赦されるということ。もしもあなたがたが嘘とでたらめをやめないならば、あとでひどい目に遭うだろうということ。私たちの神に栄えあれ。

(2) 「スモレンスクのメルクリイについての物語」³⁴

〈解題〉

書き言葉の作品として、『スモレンスクのメルクリイについての物語』が成立するのは、15世紀後半から16世紀はじめより以前ではないが、この文学作品の根底には、モンゴル・タタール襲撃とその過酷な支配の時代に発生したスモレンスク土着の口承伝説があることは疑いない。このために、モンゴル・タタールのくびきといわれる厳しい試練の時代を、北東ルーシの人々がどう耐えたのかを伝える作品として、私たちはこの伝説を13世紀に成立したものと位置づける。

私たちの時代までに、二つの種類の物語が伝えられているが、この二つの種類のあいだに相互の影響関係はなく、おおもとにスモレンスクがバトゥの大軍の攻撃をまぬがれたことを伝える古いひとつの口承伝説があり、二つの写本は独立してこの伝説を継受したと考えられる。ちなみに、史実としてはスモレンスクにバトゥの遠征軍はおよばなかった。

二つのヴァリエントのうち一つは、17世紀の唯一の写本（国立歴史博物館所蔵宗務院蔵書第908番）によるもので、写本の年代は新しいが、物語はおおもとの口承伝説にいちばん近い。この翻訳もこの写本によるテキストにもとづいておこなわれる。もう一つのヴァリエントはいくつかの編纂系統をもち、かなりの量の写本で伝承されるものであるが、書き言葉による潤色がつよく、おおもとの口承伝説からは距離があると考えられている。

長い物語ではないので翻訳を読んでもいただければ物語の筋は明らかであるが、ほかの文学作品と比較するためにここで簡単に筋書きを追っておくことにしよう。モンゴル軍の沿ヴォルガ遠征（1237-38年）のときスモレンスクはバトゥの大軍に包囲された。抵抗は絶望的と思われたが、ありふれたスモレンスクの住人であったメルクリイが聖母に導かれ、単騎モンゴルの大軍に向かって撃つてでて電撃的勝利をおさめる。しかしながら、凱旋して町に戻ったメルクリイは天使に首をはねられて死に、町の住人たちは彼の死を嘆き悲しんだ。

前近代のロシア文学には二つの類例が認められる。『ニコン年代記』1148年の項にあらわれるベレヤスラヴリの闘将デミヤン・クデネヴィチ³⁵と、ブリーナにあらわれる勇士スフマンチイ・オジフマンチエヴィチ（スフマン・ドマンチエヴィチ）³⁶である。いずれも、単騎敵陣に斬りこみ敵を潰走させるが、深い戦傷を受けて自陣

にもどって（あるいは、自陣にもどり、深い精神的打撃を受けて）死ぬヒーローである点が共通している。

デミヤン・クデネヴィチの話は、ルーシ諸公間の内紛を背景としている。

1148年のこと、グレープ・ユーリエヴィチ公はペレヤスラヴリをうかがうが、ペレヤスラヴリ公ムスチスラフ・イジャスラヴィチのもとに多くの軍勢と勇者デミヤン・クデネヴィチがいたために「恐怖に捕らわれ、多くの損失を出し、多くの人を失って」ペレヤスラヴリを退散する。

危機におよんでペレヤスラヴリ公はデミヤン・クデネヴィチのもとに駆けつけて次のように言う。「神の人よ、いまこそ神のお助けのあるときだ。いと清らなる聖母の助けのあるときだ。そなたの勇氣と強さこそが必要なきなのだ。」が、グレープ公はペレヤスラヴリの攻略をあきらめない。こんどは騎馬民族のポーロヴェツ人とむすんでペレヤスラヴリに迫ったのである。「彼らは夜の闇に乗り、ちょうど朝焼けが東の空を染めるころペレヤスラヴリにせまり、ポサド（商業地区）を焼いたが、誰も軍勢が来たことに気がつかなかった。彼らは町を包囲した。町にはたいへんな混乱と嘆きがわきあがった。

デミヤン・クデネヴィチは単騎町を出て、鎧兜を身につけずに神の助けによって、多くの軍勢を打ち破ったが、ポーロヴェツ人の矢に倒れて人事不省のまま町にもどった。敵の軍勢は恐怖に捕らわれてめいめい自陣に逃げもどった。デミヤンは戦傷のため、完全に人事不省の状態だった。まもなく彼のもとに大公ムスチスラフ・イジャスラヴィチが駆けこんできて、たくさんの恩賞と権力をあたえることを約束した。デミヤンは言った。『人の世の空しさだ。死におよんでだれがやがて朽ちる恩賞や失われる権力を望むだろうか。』デミヤン・クデネヴィチはこういい終えると、永遠の眠りについた。彼のことを慕って町で多くの人々が嘆いた。」

一方、スフマンチイの場合はどうであろうか。スフマンチイが登場するのは、キエフ大公ウラジーミルの催す宴である。集まった人々がつぎつぎに自慢話をはじめなかで、スフマンチイひとりが黙りこくっている。ウラジーミルがスフマンチイを問いただすと、スフマンチイは、狩りに出て白鳥を生け捕りにして帰ることを約束する。

しかし、狩に出たスフマンチイはドニエプル川でタタールの軍勢が攻撃態勢に入っているのを知り、これと戦って壊走させ、その際腹に矢傷を負う。彼は傷口にケシの葉を突っ込んでキエフに帰るが、白鳥を持ち帰らなかったためウラジーミル公に牢に入れられる。やがてドニエプルでのスフマンチイの働きが証明されて大公は彼を牢から出すが、スフマンチイは牢からまっすぐ荒野へ向かい、「もう私を見ることはあるまい」と言って傷口

のケシの葉を取る。傷口からは血が噴出し、スフマンチイは「我が血よ、スフマン川となれ」と唱えたのだった。

こうした英雄叙事詩の主題が『スモレンスクのメルクリイについての物語』の根底にあることは間違いないが、この物語には聖者伝的、宗教的潤色が加えられている。

既述のように、歴史的な事実としては、バトゥの遠征軍はスモレンスクには達しなかったし、スモレンスクはモンゴル軍の包囲は受けていない。しかしながら、この物語にはバトゥの征服時代にルーシ全土が受けた衝撃がよくあらわれている。

ロシアの歴史のなかでも未曾有のこの難局は、神の庇護と英雄的人物の登場によってはじめて乗り越えることができる。ここで思い描かれた英雄の人物像は、モスクワにさきだち台頭したトヴェーリの公ミハイルとして結実したように思われる³⁷がどうであろうか。

ちなみにこの物語は、ドストエフスキイの『カラマーゾフの兄弟』に登場する。3兄弟の淫蕩な父フョードルがゾシマ長老を嘲笑しようとする場面、フョードルは次のように言う。

「…『殉教者列伝』のどこかに、何とかという奇跡の聖者について書かれたところがございましてその聖者が信仰のために迫害を受け、首をはねられたところ、立ちあがって、自分の首を拾いあげ、『やさしく接吻した』、それも、首を両手に抱えて永いこと歩きつづけ、『やさしく接吻した』と書いてあるのですが、長老さま、あれはほんとうでございしますか。…」(『カラマーゾフの兄弟』上、原卓也訳、新潮文庫、82-83頁)

〈翻訳〉

スモレンスクのメルクリイについての物語

スモレンスクの町にメルクリイという名の若い男がいた。この男は主の教えをよく守り、昼となく夜となく主の教えに学び、模範的な生活ぶりとして齋戒と祈りによって、あたかも神の恩寵でこの世界全体に輝きわたる星のように輝いていた。彼は魂が謙虚で、しばしば感極まって涙し、主の十字架のもとに行ってはペトロフスコエ百人区³⁸の住民たちのために祈った。

なぜなら、その頃、気性の荒い邪悪なバトゥ³⁹がルーシの地を征服していたからである。バトゥは無辜の人々の血を湯水のごとく流し、キリスト教徒たちをおびただしく殺害した。

そして、この皇帝は大軍をもって神に救われることになるスモレンスクの町にやってきて、町から30ポプリシチェ⁴⁰のところにとどまり、多くの聖なる教会に火をかけ、キリスト教徒たちを殺め、必ずやこの町を陥落させると心に決めた。人々は大いなる悲しみに沈み、聖なる聖母の大聖堂⁴¹に立てこもって大きな叫び声をあげ、たくさんの涙を流しながら、心をこめて万能の神といと

清らなる聖母とあらゆる聖者たちに対して、あらゆる災難から町を守ってくださるようにと祈った。

すると、神のお告げの幻が住民たちに現われた。市の郊外、ドニエプル川のほとりに洞窟修道院⁴²があった。その修道院教会の堂務者にもったいなくも聖母さまが現われて言った。「おお、神に仕える人間よ。はやく十字架のもとにいくがよい。そこにわがお気に入りの者メルクリイが祈っている。この者にこう言いなさい。『おまえのことを聖母さまが呼んでいる』と。この者がそこに行ってみると、十字架のもとでメルクリイが神に祈っているのが見えた。彼は「メルクリイ」と名を叫んだ。メルクリイは答えた。「わが主人よ、どうしたというのだ。」そして、彼はメルクリイに言った。「兄弟よ、はやく行きなさい。聖母さまが洞窟修道院教会に来なさいとおまえのことをお呼びだ。」

聖なる教会に入ると、神の知恵を授けられたこの人間は、いと清らなる聖母さまのお姿を見たのである。聖母さまは金の玉座を座し、胸にキリストを抱き、天使の軍勢を付き随えていた。彼は聖母さまの足もとに身を投げ出し、大いなる謙譲の気持ちをもって叩拝し、恐れに打ちひしがれていた。いと清らなる母は、地に伏した彼を助け起こし、彼に言った。「わが子、メルクリイよ、私の選ばれたる者よ。あなたを送ります。はやく行って、キリスト教徒の流された血に復讐をなさい。行って、気性の荒い邪悪な皇帝バトゥとその軍勢に勝利をおさめなさい。そのあと、ひとりの顔の美しい人間がおまえに近づいてくる。その人間に自らの武器をぜんぶ手わたしなさい。すると、この者はおまえの首を切り落とすでしょう。おまえは首を自らの手でもって自分の町に入場なさい。そこで臨終を迎えるがよい。おまえの遺骸は私の教会に安置されるでしょう。」

彼はこのことをひどく悲しみ、泣き出して言った。「いと清らなるご主人さま、われらがキリストさまのお母さま、どうして、呪われたかよわいこの私、あなたさまのとるに足らない僕である私が、そのような大事を成し遂げることができるのでしょうか。ご主人さま、気性の荒い邪悪な皇帝をうちまかすのに、あなたの天の力では足りないのでしょうか。」そして、メルクリイは聖母さまから祝福を授かり、全身武具に身を固めてその場を退いた。そして、叩拝すると教会から出て行った。すると、そこに精悍な馬がいるのを見出し、それにまたがって町から出陣した。

そして、気性の荒い邪悪な皇帝の軍勢のいるところに到着すると、神といと清らなる聖母さまの助けで敵をさんざん打ち破り、囚われたキリスト教徒たちを集め、自らの町に連れ帰って解放した。彼は宙を舞うワシのように、実に勇敢に軍勢から軍勢へと駆けまわった。気性の荒い邪悪な皇帝は、配下の軍勢がさんざんに打ち殺され

たことを知ると、畏れと恐怖に捕われ、わずかな従者たちをつれて一目散に町から逃げ去った。そして、ハンガリーにいたると、この気性の荒い邪悪な者は、ステファン皇帝に殺された⁴³。

すると、どうだろう、メルクリイのまえに非常に美しい戦士が立っていた。彼はこの戦士に叩拝し、自らのあらゆる武具を手渡し、この戦士のほうに首を傾げると、首がはねられた。そして、この至福の者は自らの首を片手に取り、別の手で自らの馬の手綱をとると、首のないまま町に入場した。これを見た人々はご神慮のかたじけなさに深く心を打たれた。そして、彼がモロギンスキイ門⁴⁴に着くと、水のなかから見も知らぬひとりの乙女が現われて、聖者が首なしでゆくを見ると、この聖者をくちぎたなく罵りはじめた。彼はこの門のところで身を横たえ、敬虔に主に自らの魂をわたした。すると、この馬はその瞬間消えさった。

この町の大主教が十字架をもち、民衆を大勢引きつけてやってくると、聖者の尊い遺骸を引き取りろうとした。だが、聖者は彼の手にはわたろうとしなかった。そのとき、人々のあいだで大いなる啼泣と慟哭が湧きあがった。聖者が起きあがろうとしなかったからである。大主教はたいそう困惑し、このことで神に祈った。すると、どうだろう、ある声が大主教のもとに届いた。声は言った。「おお、主の僕よ、このことを悲しむ必要はない。勝利をもたらしたかたが彼を葬るだろう。」

聖者は三日間葬られぬまま横たわっていた。この大主教は夜中ずっと眠りもせずに付き添い、神が彼にこの秘密を明かしてくださるよう神に祈っていた。すると、どうだろう、自分の目で注意深く向かいの大聖堂を見ていると、突然、まるで太陽の光のようなまばゆい輝きのなかで、いと清らなる聖母さまが大天使ミハイルとガヴリルを付き随えて教会から出てきたのである。そして、聖者の遺骸が横たわっている場所に来ると、いと清らなる聖母さまが聖者の遺骸を抱き、自らの大聖堂のなかに運び、自らの場所である柩のなかに安置したのである。その遺骸は今にいたるまでその場にあり、あらゆる人がそれを目にしている。遺骸はわれらが神キリストの誉れのために奇跡をおこない、糸杉のように芳香を發しているのである。大主教は朝祷のために教会に入ると、すばらしい奇跡を目にした。聖者が眠るかのよう自らの場所に横たわっていた⁴⁵。そして、人々は雪崩のごとくここに集まりつどい、この奇跡を見て神を讃えた。

(3) 「キーテジの町についての伝説」⁴⁶

〈解題〉

キーテジ伝説は古儀式派の文学的創作によって私たちの時代に伝わっている。『年代記と呼ばれる書』の最終

的なヴァージョンは、古儀式派の一派である逃亡派によって18世紀後半に創作されたものである。しかしながら、作品は独立性の強い二つの部分からなるが、その両者が結びつけられたのは17世紀のことであると考えられる。

ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチ公⁴⁷とそのバトゥによる殺害、キーテジの町の破壊について物語る前半部分は、バトゥの来寇の時代にさかのぼる説話が反映していると考えられる。物語がいかにも伝説的であるとはいえ、その根底には実際の歴史事件がある。

「聖なる敬虔な大公ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチ公」とは、有名なシチ川の戦いで多勢に無勢ながら敢然とバトゥに戦いを挑み、散華したウラジーミル、スーズダリの公ゲオルギイ2世フセヴォロドヴィチのことである。年代記によれば、このゲオルギイ・フセヴォロドヴィチはウラジーミル公となる以前、1216年から1219年までのあいだ、ゴロジェツの分領公となっていた。このことから、この物語で語られるヴォルガ川畔のマールイ・キーテジはゴロジェツを指すと考えられる。1237年、バトゥの大軍がウラジーミルにおしよせたとき、ゲオルギイ公はヤロスラヴリ方面に退避し、やがてそこで大敗を喫したが、両キーテジがあったのはまさにその地である。

もちろん、伝説におけるこの公のイメージは歴史におけるそれと完全に一致するわけではない。ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチ公は、ルーシをキリスト教国にしたウラジーミル聖公の子孫とされ、ノヴゴロド公フセヴォロド・ムスチスラヴィチの息子とされているが、これは事実と異なっている。ありもしないこのような血縁関係が創られたのは、伝説に力をあたえるため、主人公であるゲオルギイ・フセヴォロド公を神聖化する必要があったからであろう。

『年代記と呼ばれる書』の後半部分、「秘められた町キーテジについての物語と懲罰」はいかなる歴史的背景ももっていない。この箇所はむしろ「地上の天国」について論じた聖書外典（アポクリファ）的伝説のひとつであると考えるのがふさわしい。「秘められた」町キーテジのイメージをロシア思想史的に位置づけるなら、ロシアのもっとも古いアポクリファである「地上の天国」と、18世紀にロシア農民のあいだで人気の高かった伝説的な幸福の国、ペロヴォジエ（白水郷）との中間にその場所を占めることになるだろう。

〈翻訳〉

6646(1237)年9月5日に書かれた年代記と呼ばれる書

この聖なる敬虔で偉大な公、ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチは、聖なる敬虔で偉大な公フセヴォロドの息子で、聖なる洗礼のときにガヴリールという名があたえら

れ、プスコフの奇跡成就者であった⁴⁸。この聖なる敬虔で偉大な公フセヴォロドは、偉大なる公ムスチスラフ⁴⁹の息子であり、ロシアの国の専制君主、使徒にならびたつ聖なる公キエフのウラジーミル⁵⁰の孫であった。聖なる敬虔で偉大な公ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチは、聖なる敬虔で偉大な公ウラジーミルの曾孫であった。

聖なる敬虔な公フセヴォロドは最初、大ノヴゴロドの公であった。しばらくすると、ノヴゴロドの者たちがこの公に不満を抱き、内輪でこう決めつけた。私たちの公は洗礼を受けていないにもかかわらず、洗礼を受けた私たちが支配していると。ノヴゴロド人たちは相談し、彼のもとに来て彼を追放した。彼はキエフにいる自らの叔父ヤロ波尔ク⁵¹のもとに来て、どういう理由で自分がノヴゴロド人たちによって追い出されたのかについて、包み隠さず語った。ヤロ波尔クはフセヴォロドからこの話を聞いて、彼にヴィシゴロドをあたえた。

そうしているうちに、フセヴォロドはプスコフ人たちに自分たちの公になってほしいと懇請されて、彼らの町プスコフにやってきた。そして、しばらくたってから聖なる洗礼の恵みを授かり、聖なる洗礼においてガヴリールの名をあたえられたのである。フセヴォロドは大いな齋戒と禁欲のうちに暮らし、一年後に永遠の平安へと旅立った。6671年(1163年)2月11日のことである。そして、自らの息子、敬虔で偉大なる公ゲオルギイによって葬られた。彼の聖なる遺骸から、われらが神キリストとあらゆる聖者の栄えと誉れのために、たくさんの奇跡が起こった。アーメン。

この聖なる敬虔な公ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチは、聖なる洗礼ののちはガヴリールと名乗った、自らの父、敬虔なる公フセヴォロドの逝去のあと、プスコフ人たちの懇請によってプスコフ公位にとどまった。6671年(1163年)のことである。聖なる敬虔で偉大なる公ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチは、敬虔なるチェルニーゴフ公ミハイル⁵²のもとにゆくことを思い立った。

敬虔で偉大なる公ゲオルギイが敬虔なる公ミハイルのもとに来ると、ゲオルギイはミハイルに深くお辞儀をして言った。「健勝にてあれ、敬虔なる偉大なる公ミハイルよ。そなたは敬虔さとキリストへの信仰によって長年にわたり輝いた。あらゆる点において、そなたは私たちの曾祖父たち、そして、曾祖母、敬虔で偉大なる公妃オリガに匹敵する。オリガは選ばれた尊い真珠キリストと、キリストの聖なる預言者、使徒、聖なる教父の信仰をおのれのものとした。そなたは、敬虔でキリストを愛する皇帝、使徒にならびたつ私たちの先祖、コンスタンティノスに似ている。」

すると、敬虔なる公ミハイルは彼に言った。「健勝であれ、敬虔で偉大なる公、ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチよ。そなたは有益な助言と独立不羈なる眼差しをもつ

て私のもとにやってきた。だが、われらが祖先に対する羨望からスヴァトポルクが何を待たせようか。スヴァトポルクは支配することを望み、自らの弟たち、敬虔で偉大な公たちを殺害した。公でいる彼らを、ボリスは槍で突き殺すように、グレープはナイフで切り裂くように命じたのだ。スヴァトポルクは悪魔の唆しによって甘言で彼らをだました。彼らの母が死に瀕していると言ったのだ。彼らは純潔無垢な子羊として、聖なる牧夫キリストに準えられる。自らの兄である敵に立ち向かうことはなかったのだから。主は、自らのお気に入りの聖なる敬虔な公、大いなる奇跡成就者ボリスとグレープを讃えている。」

そして、彼らは抱擁と接吻を交わし、心の底から祝い、楽しんだ。敬虔で偉大な公ゲオルギイは、敬虔なる公ミハイルに言った。「私たちのルーシの地で、神の教会と城壁を建設することを許す旨の証文をいただきたい。」すると、敬虔で偉大な公ミハイルは言った。「そなたが望むとおり、至聖なる神の御名の栄と誉れのために神の教会を建てるがよい。このよき発願のゆえにそなたは、キリストの再臨のときに大いなる褒美を受け取ることだろう。」

そして、二人は何日にもわたって宴を催した。敬虔なる公ゲオルギイが自分の屋敷に帰ろうと考えると、敬虔なる公ミハイルは証文を書くように命じ、自分の手で署名をした。敬虔なる公ゲオルギイが自らの祖国と町に帰ろうとすると、敬虔なる公ミハイルは大いなる敬意を払って彼を送り出し、見送った。二人の公が路上にあり、道に立ってたがいにお辞儀をしていると、敬虔なる公ミハイルはゲオルギイに証文を手渡した。敬虔なる公ゲオルギイは敬虔なる公ミハイルから証文を受け取り、ミハイルにお辞儀をすると、ミハイルも返礼をした。

ゲオルギイはさまざまな町を訪ねあるき、ノヴゴロドにいたると、6672年(1164年)私たちの聖母、神聖なる女主人、永遠なる処女マリアの就寝を記念して教会を建てるように命じた。ゲオルギイはノヴゴロドから自らの町プスコフに到着した。この町で彼の父、敬虔なる公フセヴォロド、聖なる洗礼ののちにはガヴリール、ノヴゴロドとプスコフの奇跡成就者が、その生を終えたのだった。それから、彼はプスコフからモスクワに赴き、6672年(1164年)、私たちの聖母、神聖な女主人、永遠の処女マリアの就寝を記念して教会を建立することを命じた。さらに彼はモスクワからペレヤスラヴリ・ザレスキイにゆき、ペレヤスラヴリからロストフに赴いた。

このころ、ロストフの町では、大公アンドレイ・ボゴリュプスキイ⁵³が公位にあった。敬虔なる公ゲオルギイは、6672年(1164年)5月23日、ロストフの町に私たちの聖母、永遠の処女マリアの就寝を記念して教会を建立するように命じた。ゲオルギイが大公であったときに、

教会を建立するための堀が掘られ、キリストの司祭、奇跡成就者、ロストフ主教レオンチイ⁵⁴の遺骸が見出された。レオンチイはロストフの町の人々をキリスト教に導き、下々のものから貴顕まで改宗させた。

そして、敬虔なる公ゲオルギイは大いに喜んでもり、自らにこれほど尊い宝をあたえた神を讃え、祈禱歌を歌った。彼はアンドレイ・ボゴリュプスキイ公にムーロムの町にゆき、ムーロムの町に私たちの聖母、神聖なる女主人、永遠の処女マリアの就寝を記念して教会を建立するように命じた。

敬虔な大公自身はロストフの町を出立し、ヴォルガ川の岸辺にあるヤロスラヴリの町にやってきた。彼は平底舟に乗りこみ、ヴォルガを下流にくぐり、ヴォルガの岸辺にあるマールイ・キーテジ(小キーテジ)に到着し、町の建設を仕上げ、この町のすべての人々はこの敬虔なる公ゲオルギイに、聖なるフェオドロフスカヤの奇跡の聖母イコンがこの町に行幸するようにと懇請しはじめた。彼はこの請願を聞き入れ、実行に移した。

人々は聖母への祈りを歌いはじめた。歌いおわると、このイコンを町に運びいれようとした。だが、イコンはその場から動こうとしなかった。一步たりとも前に進まなかったのである。敬虔なる公ゲオルギイは聖母の揺るぎない意志を垣間見たように思い、聖母ご自身がお望みになったその場所に、フェオドロフスカヤの聖母の名において、修道院を建立するように命じた。

敬虔なる公ご自身はその場所から水路ではなく、陸路で出立した。そして、彼はウヅラ川をわたり、サンダ川という名の二つ目の川をわたり、サノクタ川という名の三つ目の川をわたり、ケルジェネツ川という四つ目の川をわたり、スヴェトロヤールという名の湖にいたった。そして、この場所が目をみはるほど美しく、多くの人が集まっていることに気づいた。そして、敬虔なる公ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチは彼らの懇請にしたがってスヴェトロヤール湖のほとりに、ポリショイ・キーテジ(大キーテジ)という名の町を建設した。なぜなら、この場所はたいへん美しく、湖の向こう岸には檜の木立があったからである。

敬虔なる大公ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチの助言と命令によって、この場所の守りを固めるために人々は堀を掘りはじめた。そして、主の尊い十字架の顕揚の名において教会の建立をはじめた。2番目の教会は、聖なる女主人、私たちの聖母にして永遠の処女マリアの名において建立された。3番目の教会は、聖なる女主人、私たちの聖母にして永遠の処女マリアの受胎告知の名において建立された。ゲオルギイ公は、これらの教会のなかに主と聖母の別の祝日のための宝座を設えるように命じた。また、同様にあらゆる聖人たちのためにイコンを描くように命じた。

そして、このポリショイ・キーテジの城壁は縦と横が100サージェン⁵⁵ずつであった。最初の規模は小さかったのである。敬虔なる公ゲオルギイは縦をさらに100サージェン増やすように命じた。その結果、この町は縦が200サージェン、横が100サージェンの大きさになったのである。この石の城壁を建設しはじめたのは、6673 (1165) 年の5月1日、聖なる預言者イエレミアそのほかの聖者たち⁵⁶を記念する日であった。建設には3年の月日がかかった。建設が終ったのは6673 (1167) 年9月30日、聖なる殉教者大アルメニアのグリゴリーを記念する日であった。

そして、敬虔なる公ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチは、ヴォルガの岸辺にたつマールイ・キーテジに赴いた。この二つの町、マールイ・キーテジとポリショイ・キーテジの建設ののち、二つの町が何ポプリシェ⁵⁷くらい離れているか、計るように命じた。敬虔なる公ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチ公の命令によって、二つの町のあいだの距離が100ポプリシェであることがわかった。敬虔なる公ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチはこれを聞き、神と至聖なる聖母を讃え、また、年代記にその旨を記すように命じた。

敬虔なる大公ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチは勤行をすべて執りおこなうように命じた。フェオドロフスカヤの至聖なる聖母イコンに祈祷歌をうたい、この勤行を終えたあとで出立し、平底舟に乗り、先に述べた自らの町プスコフへと旅立った。人々は大いなる敬意をもって彼を見送り、彼に接吻をして別れを告げた。

敬虔なる公ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチは自らの町、先に名を挙げたプスコフに到着すると、来る日も来る日も祈り、断食、徹夜禱に明け暮れ、乞食、やもめ、孤児たちにたくさんの喜捨をあたえた。これらの町々を建設してから、75年間生きた。

6747 (1239) 年のことであった。私たちの罪ゆえに神が遣わした災難が降りかかり、神をも恐れぬ不敬なるツァーリ、バトゥが戦を仕掛けてきた。バトゥは町々を略奪して火で焼きつくし、神の教会を略奪して同じように火で焼きつくした。人々は刃の犠牲となった。幼い子どもたちは剣で切り殺され、若い娘たちは強姦された。人々は大いに啼泣した。

敬虔なる公ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチはこれを聞くと、ひどく泣いた。そして、主と至聖なる神の母に祈り、自らの兵を集め、配下の兵たちとともに不敬なるツァーリ、バトゥに立ち向かっていった。そして、両軍が激突すると、激しい斬りあいのはじまり、おびたしい血が流された。そのとき敬虔なる公ゲオルギイのもとにはわずかの兵しか残されていなかった。敬虔なる公ゲオルギイは、不敬なるツァーリ、バトゥのもとからヴォルガをくだって下流に、マールイ・キーテジへと逃げ出

した。敬虔なる公ゲオルギイは不敬なるツァーリ、バトゥと長いあいだ干戈をまじえ、バトゥを町に入れなかった。

夜であった。そのとき敬虔なる公ゲオルギイはひそかにこの町を出てポリショイ・キーテジの町に向かった。翌朝、この不敬なるツァーリは目を覚ますと、配下の兵たちとともにこの町に進撃し、町を占領した。そして、この町に住むあらゆる人々を撃ち殺し、切り殺した。しかし、この町で敬虔なる公を発見することができず、一人の人間を拷問にかけた。この男は拷問の苦しみに耐えかねて、バトゥにポリショイ・キーテジへの道を教えた。

この不敬なるツァーリは敬虔なる公ゲオルギイのあとを追った。この町に着くと、配下の大勢の兵たちとともに攻撃し、スヴェトロヤール湖のほとりにあるポリショイ・キーテジの町を占領し、2月4日、敬虔なる公ゲオルギイを殺した。かの不敬なるツァーリ、バトゥはこの町から出立した。彼のあとには、敬虔なる公ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチの遺骸が曳かれていた。この惨劇のあと、ヴォルガの岸辺にあるマールイ・キーテジとスヴェトロヤールの岸辺にあるポリショイ・キーテジの町は荒廃した。

そして、ポリショイ・キーテジはキリストの再臨まで見ることはできないであろう。聖なる師父たちの聖者伝、『モナーシイ聖者列伝』、『スキト聖者列伝』、『いろは聖者列伝』、『エルサレム聖者列伝』、『聖山聖者列伝』⁵⁸が証言しているように、それはかつて不可視であった。聖なる師父たちの聖者伝が収められているこれらの聖なる書物は一致して、隠された修道院がひとつではなく、たくさん秘められた修道院があり、その修道院には実におびたしい数の聖なる師父たちがいて、自らの暮らしぶりによって空の星々のように輝いていると記している。海の真砂を数えることができないように、これら聖者たちのことをすべて書き記すことはできない。

彼らについて、聖なる魂によってすべてを見透しながら、至福なる預言者ダビデ王は驚きを覚えながら、聖なる魂によって叫び、神に靈感を吹きこまれた書物、自らの『詩篇』のなかで、次のように言っている。「義人は棕櫚の木のように咲きほこり、レバノン杉のように高くそびえる。われらが神の館の庭に植えられていまはさかりと咲きほこる。」そして、預言者ダビデ王は言っている。「神よ、あなたの御心は私には高くそびえあがるばかりです。義人たちの数ははかりしれず、彼らをすべて数えることはできません。彼らは真砂よりもたくさんおわす。」

彼らについて、聖なる魂にすべてを見透しながら、至福なる使徒パウロは自らの手紙のなかで私たちに次のような言葉を言っている。「喪失、悲しみ、悪意に耐えながら、彼らは羊や山羊の毛皮を身にまとって放浪していた。全世界も彼らほどの値打ちはない。」同じような言

葉を金口ヨハネスは、大齋期3週目の説教で言っている。同じような言葉を、すべてを見透しながら、シナイ山の聖アナスタシオス⁵⁹がわたしたちに言っている。こうした使徒の言葉を、すべてを見通しながら、至聖なるわれらが教父、大イラリオン⁶⁰が言っている。彼は聖者たちについて書いている。「終末のときにはこのようになるだろう。町々や修道院が秘匿されるであろう。アンチキリストがこの世を支配しはじめるからである。そのとき人々は山や洞窟や地の裂け目に逃げこむだろう。」

人間を愛する神はそのとき救済されたいと望む者たちを放ってはおかれぬ。人はひたむきさ、誠心誠意なるこころ、涙によって神からすべてを得る。聖なる福音書のなかで、救世主ご自身の聖なるお口から、「救われたいと求め、そう望む者はすべてがあたえられる」とおっしゃっている。

そして、聖なる敬虔なる大公ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチが殺害され、その尊い遺骸が葬られたのち6年たって、ツァーリ、バトゥはロシアの帝位を奪いに來た。バトゥに立ち向かったのは、チェルニーゴフのミハイル公と配下の貴族フェオドルであった。両軍は衝突し、流血の惨事となった。かの不敬なるツァーリ、バトゥは、敬虔なる大公チェルニーゴフのミハイルと配下の貴族フェオドルを6750(1241)年9月20日に殺した。敬虔なる公ミハイル殺害の2年後、この不敬なるツァーリ、バトゥは敬虔なる公、スモレンスクのメルクリイを殺した。6755(1246)年11月24日のことであった。かくして、モスクワ公国とそのほかの修道院は荒廃し、6756(1248)年、かの町ボリショイ・キーテジも滅んだのである⁶¹。

秘められた町キーテジについての物語と懲罰

もしもある人間が真実にそこに行きたいと誓うならば、嘘ではなく、誠心誠意、齋戒を守り、たくさんの涙を流しそこに行くならば、飢え死にするようなことがあってもそこから出ていかないと誓い、そのほかの多くの悲しみに耐え、よしんば死ぬことがあったとしても、そのような人間は神がお救いになると知るがよい。なぜなら、彼のすべての歩みは天使によって教えあげられ、書き留められるからである。なぜなら、『スキト聖者列伝』のような書物が証立てしているとおりに、このような者は救済の道を踏みだしているからである。

ある師父がいた。その師父はあるふしだらな女を淫蕩から救いだした。ふしだらな女はこの師父とともに修道院にいった。そして、修道院の門にいたると死んだ。そして、救われたのである。二人目の女は師父とともに荒野に行き、死んだ。天使たちは彼女の魂を受け入れ、階梯をつたって空へと運びあげた。

同じようなことがこの人間にも起こった。もしも死ぬようなことがあったとしても、それは神の書である聖書

にしたがって裁かれるのである。というのは、この逃亡者は、魂の問題として、この世の汚穢で満たされた、バビロンの暗いふしだらな女からの逃亡者に匹敵するからである。聖なる神学者ヨハネは自らの書物、『黙示録』のなかで終末のときについて書いた。七つの頭をもつ獣にすわった恥知らずの女が足をむき出しにして、汚穢でいっぱいになった、とんでもない悪臭を放つ杯をみずからの手にもち、それをこの世界に生き、それを愛する者たちに手わたす。最初に総主教たちに、ツァーリたちに、公たちに、軍司令官たちに、あらゆる富んだ頭官たちに、この空しい世に生き、その歡樂を愛するすべての人々にその杯を手わたす。

だが、救われたいと欲し、望む者は、この世とその歡樂から逃げなくてはならない。ヨハネは聖なる魂によってすべてを見透しながら、次のようにいった。女が荒野に逃げると、蛇がその跡を追い、謙虚で魂の正しい生き方をしたいと望んでいる者が正しい道を踏みはずすように誘惑する。この呪われた蛇は、広々とした大きな道、悪の街道を行くようにたぶらかし、いつわり、正しい道を踏みはずすように唆し、惑わし、墮落した生き方をするように命じ、正しい道を歩む者をあざむく。

神の恩寵は何にもまして、救済を望み、願い、求める者を諭し、助け、教え、その者を完全に精神的な謙虚な生活に導く。何者も、いついかなるときも、どこにあっても主から見捨てられて取り残されることはない。私が呼ぶとき、その叫びはかならず神に聞き届けられる。あるいは、求めるとき神に受け入れられないことがあるか。探して神において見つからないものがあるか。主は、自らのもとに來る者すべてを喜びをもって受け入れ、呼び招くからである。

しかしながら、ふだんは天の諸力も神の御顔を見ない。が、罪人が地上で告解するときには、あらゆる天の諸力がキリストの御顔をはっきりと見て、キリストの神性の誉れが開かれ、キリストの御顔を眼にすることができる。なぜなら、悔い改めた罪深い魂だけが、天上世界において、天の諸力とそのあらゆる聖者たちを喜ばすことができるからである。その諸力というのは、天使たち、大天使たち、智天使たち、熾天使たち、さまざまな根源と権力、あらゆる支配の力である。そして、聖者たちとは次のものである。預言者たち、使徒たち、主教たち、聖なる正しい殉教者たち、女の殉教者たち、そのほかのあらゆる聖人たちである。罪人たちの改悛だけが、すべての天の諸力、あらゆる天の聖人を喜ばすのである。

望まない者、懸命の努力をしない者、自分が救済されたいと思わない者を、主は貧窮や隷属によって苦しめはしない。しかしながら、ひたむきさや心の望みの正しさに対しては、神は人間にあらゆることをしてくださる。誰かがふたごころない気持ちと揺るぎない信仰で誓いを

立て、空しいものに心煩わされないならば、父にも母にも姉妹にも兄弟にも語らず後戻りしたとしても、神はそのような者に救済への道を拓き、私たちの聖なる師父たちの祈りによって、安らぎに満ちた心しずかな隠れどころに導いてくださるのである。

師父たちは昼となく夜となくつねに熱心に祈りを捧げてくださっている。彼らの口からは、香炉から芳香が漂うかのように、祈りが流れだしている。いつもの誓いではなく真実の心で望む者のことをも、師父たちは祈ってくださる。誰かが救われたいと望み、祈りを捧げるなら、誰かがどこからでもとにかく神に向きあうなら、そのような者は神から諭しをいただいた者として、喜んで受け入れられるのである。

そのような聖なる場所に行きたいと望む者は、ずるがしこい堕落した考えをもってはならない。そうした考えは心を騒がし、そこに行きたいと望む人間の思いをわき道にそらす。聖なる場所から遠ざけようとする悪い物思いから、我が身をしっかりと守るがよい。あれこれと思ひ惑わぬがよい。そのような人間には、主が救済の道を用意してくださる。あるいは、そうした人間のもとには、かの町、かの修道院から報せが届くだろう。かの町もかの修道院もいずれとも隠れてしまった。年代記がかの修道院のことを記すだけである。緒言にもどることにしよう。

もしも誰かがその地に赴こうとしたが、疑念が生じたのなら、あらゆる場所でその地を誉めたたえたとしても、主はそのような者には道を閉ざしてしまうであろう。そのような者には、森と原野が見えるだけだろう。そのような者は何も受け取らない。その労働は実を結ばぬままである。そのような者は神の御心にかなわず、惑わし、咎めだて、面よごしがその身に起こるであろう。この世の終わりに奇跡が起こる聖なる場所を手ひどく嘲ったがゆえに、そのような者はこの世でも来世でも罰や非難に晒され、常闇に苦しむことになる。この町は見えないのだ。だが、かつてはここにたくさん修道院があった。聖なる師父たちの聖者伝に書かれていた、そうしたさまざまな修道院も隠れてしまった。詳しいことは聖者伝を見ればわかる。

かくして、この町ポリショイ・キーテジは見えなくなり、神の御手により守られた。騒乱に満ちた私たちの世、涙を流すことこそふさわしいこの時代が終るまで、主はポリショイ・キーテジをおのが掌によって蔽われたのである。ふさわしく正義をもってこの町にたどりついた者たちの祈りと願いによってこの町は見えなくなった。そして、そこに住む人々はアンチキリストが引き起こす悲しみと苦しみをまぬがれたのである。彼らは昼となく夜となく私たちのことを傷んでいる。私たちのモスクワ国が正道を逸れたことを嘆き悲しんでいる。なぜなら、モ

スクワ国ではアンチキリストが君臨し、汚らわしく不浄なそのあらゆる教えがもてはやされているからである。

この町の荒廃を語ったのは父たちであったが、彼らもまた、神を恐れぬ不敬なるツァーリ、バトゥによってこの町が破壊されたあとに生き残った彼らの父たちから、この話を聞いた。なぜなら、バトゥはウゾラ川流域のこの国を破壊し、大きな村も小さな村も炎で焼きつくしたからである。そして、ウゾラ川流域のこの国はすっかり森に被われてしまった。そして、このときからこのポリショイ・キーテジの町と修道院は見えなくなってしまった。

私たちがこの年代記という書物を書いたのは6759(1251)年のことである。私たちは大集会を開いてこの書を義と認め、聖なる神の教会に託した。あらゆる正教のキリスト教徒たちがもしも望んだ場合、この書を読んだり、その話を聞いたりすることができるようにである。この神の書物を嘲るためではない。もしも私たちによって承認されたこの書物を罵ったり、嘲笑ったりする者がいたなら、その者は私たちをではなく、神といと神聖なるその母、私たちの女主人である聖母、永遠の処女マリヤを嘲ることになるのだということを知るがよい。この書物のなかでは、神の母たる彼女の偉大なる名前が賛美され、大いなるものとされ、記憶されているのである。そのことによって、聖母は見守り、保ち、おのが掌で守護してくださるのである。自らの息子に対する彼らのための祈りは次のように捧げられている。

「愛しいわが子よ、どうか私の願いを無碍になさらないでください。おのが血で全世界を洗いたもうたわが愛し子よ、この世界の人間たちを憐れみ、揺るぎない信仰と清い心をもって私の名を呼ぶ者たちを大切にしてお守りください。」

このゆえに主は自らの手で彼らを守る。そのことを私たちは書き、確かめ合い、告知するのである。この私たちの決定に何もかも付け加えたり、取り去ったりしてはならない。句点ひとつ、読点ひとつにいたるまで、いかようにも変更してはならない。もしも誰かが増し加えたり、何らかの変更をしたならば、これらの話を聞き伝え、成文にした聖なる師父たちの伝説にしたがって呪われることになる。もしも不確かに思う者がいたならば、かつて生きた聖者たちの聖人伝を読み、この書に先立つ時代に多くのことが起こったことを知るがよい。

三位一体において讃えられるべき神と、この場を守り保たれるその聖なる母と、あらゆる聖者たちに栄えあれ。アーメン。

(4) 「チェルニーゴフ公ミハイル⁶²とその貴族フェオドルのハーン宮廷における殺害についての物語」⁶³

〈解題〉

モンゴル・タタール勢力に屈服したのち、ルーシの公たちは公位を安堵してもらうためにハーンの勅許状を得なくてはならなかった。ハーンの呼び出しを受ける場合もあったが、その一方で、公位をめぐるルーシ側の内紛を解決してもらうという意味合いもあった。そうしたハーン国への訪問が悲劇的な末路を遂げることもままある。1246年のチェルニーゴフ公ミハイル・フセヴォロドヴィチによる金帳ハーン国訪問は、まさにそのような例であった。ミハイル公は配下の貴族フェオドルとともにハーンの命令で殺されたのである。どのような事情でミハイル公がハーン国に赴かなければならなかったのかについては、正確にはわからない。おそらくはチェルニーゴフ公位の安堵のためであろう。

チェルニーゴフ公ミハイルの娘マリアは、1238年にモンゴル・タタール勢力のために殺されたロストフ公ヴァシリョクの妻であったが、この公妃マリアは息子たち（そのうちのひとりボリスはこの物語に登場する）とともに、正教会がミハイル公とフェオドルを聖人として崇敬するように尽力し、ロストフに彼らを記念する聖堂を建立した。この頃（マリアの死の年、1271年）までに、ミハイル公と貴族フェオドルに関する短い物語が執筆された。この短い物語を基礎にして、チェルニーゴフ公ミハイルに関するより長い物語のいくつかのヴァリエントが創られた。

そのうちの 하나가、『新たなる殉教者、ルーシの公ミハイルと彼の公国において筆頭の軍司令官であったフェオドルについての物語』である。この物語の著者は司祭アンドレイで『物語』は13世紀末までに書かれたと考えられている。この物語でも、短い物語でも、この作品のほかの編纂本でも、ミハイル公とその貴族フェオドルの死は、キリスト教の信仰のための死であると解釈されている。

ハーン国におけるチェルニーゴフ公の殺害を、キリスト教信仰のための死であると解釈することは、モンゴル・タタールの支配下という条件のなかでは政治的抵抗という性格を帯びていた。ルーシの公ミハイルは「異教徒の」意志に屈服せず、キリスト教信仰の純潔のために自らの生命を犠牲にすることもいとわなかった。彼の死に関する物語は、これがゆえに全ルーシ的な愛国的色彩を帯びたのである。

〈翻訳〉

この聖なる師父アンドレイ⁶⁴により頌詞のために簡潔

に語られた、新たなる殉教者、ルーシの公ミハイルと彼の公国において筆頭の軍司令官であったフェオドルについての物語。

6746年（1238年）、神は私たちの罪がいや増しに増したことをお怒りになって、キリスト教徒たちの国に異教徒タタール人の襲撃を送られた。ある者は町に立てこもった。ミハイル公はハンガリーに逃げた。ある者は遠い土地に逃亡し、ある者は洞窟や地の裂け目に隠れた。町に立てこもった者は自らの罪を悔い、涙を流して神に祈りを捧げたが、異教徒たちによって無慈悲にも殺された。山や洞窟や地の裂け目や森に隠れた者たちのなかで、無事に助かった者は少なかった。しばらくたつと、タタール人たちはこうした者たちを町々に配属させて、彼ら全員を台帳に書きあげ、貢税を集めはじめた。

このことを聞くと、外国にちりぢりになった者たちはふたたび故国へと帰ってきた。生き残った公やそのほかの人々である。タタール人たちは彼らを強制的に呼びたてて言った。「ハーンとバトゥに跪拝することなしに、ハーンとバトゥの土地に住むことは許されない。」多くの者たちがハーンとバトゥのもとに赴き、叩拝した⁶⁵。

そこで、ハーンとバトゥには次のような習慣をさだめた。誰かが彼らのところに跪拝に来ると、すぐにその者を自分のところに通すのではなく、まずは呪術師のところに行かせ、火を跳びこえさせたり、灌木や偶像に叩拝させたりした。そして、皇帝のために携えてきた贈り物のうち、一部は呪術師が取り、まずは炎のなかに投げられた。このあとようやく到着した者たちは贈り物とともに皇帝のもとに通された。多くの公たちが配下の貴族たちとともに火を跳びこえ、この世の名誉のために太陽と灌木と偶像に跪拝し、おのが自領の安堵を願った⁶⁶。彼らが受け取りたいと願った領地は恒久的に与えられた。彼らはこの世の榮譽のためにおもねったのである。

至福の公ミハイルはチェルニーゴフにいた。多くの者がこの世の榮譽のために阿諛追従しているのを見た神は、恩寵と聖霊の賜物を送り、かれの心に、皇帝のもとにゆきキリスト教徒の心を惑わすその嘘の仮面を剥いでやろうという考えをふきこんだ。神の恩寵のために心が燃えた至福の公ミハイルは、バトゥのもとに行くことを決心した。

そして、自らの洗礼父のもとにゆき、告解してこういった。「私はバトゥのところにゆきつもりです。」そして、師父は彼にこう言った。「多くの者がバトゥのところにゆき、この異教徒の命じるままをおこなってきました。この世の榮譽のためにおもねり、火を跳びこえたり、灌木や偶像に叩拝をしたりして、自らの魂を破滅させてきました。だが、ミハイル殿、あなたはいまバトゥのもとに行こうとなさっておられますが、そのような振る舞いをしてはなりません。火を跳びこえてはなりません

ん。灌木や彼らの偶像に叩拝してはなりません。彼らの食べ物や飲み物を口に入れてはなりません。揺るぎなくキリスト教の信仰をもってください。なぜなら、被造物に叩拝することはキリスト教徒にとってふさわしくないからです。キリスト教徒が礼拝するのは主なる神イエス・キリストさまだけです。」ミハイルは師父に言った。「父よ、あなたの祈りによって、神が思し召しになったとおりのことが起こるでしょう。私はキリストとキリストの信仰のために血を流す覚悟があります。」同じことをフェオドルも言った。「そのように行動すれば、あなたがたはこの時代の新しい聖なる殉教者となり、ほかの者たちの魂を強くするでしょう。」

ミハイルとフェオドルはこのように行動すると約束し、みずからの師父から祝福を受けた。そのとき、師父は二人に聖体礼儀を行い、はなむけをした。二人を祝福してこう言った。「神がこのふたりの信仰を堅め、ふたりを助けてくださいますように。なぜなら、神のためにふたりは受難を負うのですから。」それから、ミハイルは自らの家に帰り、自分の財産から道行に必要なものだけを取った。

多くの国々をとおりぬけ、ミハイルはバトゥのところに着いた。バトゥにこう告げられた。「ルーシの大公ミハイル殿が陛下に拝顔の栄を賜うために来着いたしました。」皇帝は自らの呪術師を呼び出すように命じた。呪術師たちがバトゥの前に来ると、皇帝は彼らに言った。「おまえたちの慣習に則って必要なことを公ミハイルにせよ。そのあと、わしの前につれてくるがよい。」彼らはミハイルのもとに行き、彼に言った。「バトゥがそなたを呼んでいる。」ミハイルはフェオドルの手を取り、彼とともに進んだ。そして、道の左右に薪が積まれた場所にいたった。

多くの異教徒どもが炎を潜りぬけ、太陽と偶像に向かって叩拝をした。呪術師たちはミハイルとフェオドルに炎をくぐりぬけるよう促した。ミハイルとフェオドルは彼らに言った。「炎を潜りぬけたり、おまえたちが拝むように炎を拜んだりすることは、キリスト教徒にはふさわしくないことだ。」ミハイルはフェオドルに言った。「私たちは、彼らが拜むものを拜んではいけない。」

呪術師たちはミハイルとフェオドルを、彼らが連れてきたその場に残し、そこから皇帝のもとに赴いて言った。「帝よ、ミハイルはあなたのご命令にしたがいませぬ。炎を潜りぬけようとしなさい、あなたの神々を拜むこともいたしません。『キリスト教徒が炎を潜りぬけたり、神によって創られたもの、すなわち、太陽や偶像を拜むことはふさわしくない。こうしたものをお創りになった神、父と子と聖霊のみに叩拝すべきなのだ』と仰います。」

皇帝はいたく立腹し、自らの貴顕の一人でその名をエ

ルデガという者を遣いにやった。皇帝はこう言った。「ミハイルに伝えるがよい。『どうして私の命令を軽んずるなどという向こう見ずな行いをするのか。どうして私の神々を拜まないのか。さあ、二つに一つを選ぶがよい。私の神々を拜んで生きながらえ、公の位をたもつのか。あるいは、私の神々を拜まないならば、むごたらしい死にかたをするだろう』と。」

エルデガはミハイルのもとにいてこう言った。「皇帝はこうおっしゃっている。『どうして私の命令を軽んずるなどという向こう見ずな行いをするのか。どうして私の神々を拜まないのか。さあ、二つに一つを選ぶがよい。私の神々を拜んで生きながらえ、公の位をたもつのか。あるいは、私の神々を拜まないならば、むごたらしい死にかたをするだろう』と。」

このときミハイルは答えた。「皇帝よ、私はそなたには叩拝しよう。なぜなら、神はそなたにこの世界に君臨する権能をゆだねたからである。だが、そなたが叩拝せよと命ずるものに関しては、断じて叩拝すまい。」エルデガは彼に言った。「ミハイルよ、知るがよい。おまえはすでに死んでいる。」ミハイルは彼に言った。「私は、私のキリストのために受難を負うこと、正教の信仰のために自らの血を流すことを望んでいる。」

そのとき、はげしく泣きながら、ロストフ公である彼の孫ボリスが言いはじめた。「主人である父よ、叩拝してください。」同じように、貴族たちが言いはじめた。「すべてはあなたのためです。教会から自らの配下の者ども全員と罰を受けましょう⁶⁷。」ミハイルは彼らに答えた。ミハイルは彼らに答えた。「私は名前だけキリスト教徒と名乗り、その実異教徒のように振舞うことはしたくない。」

ミハイルが彼らとともに話しているとき、フェオドルは心のなかで考えていた。「もしも自らの妻の愛や自らの子供たちの可愛さを思い出したなら、ミハイルは彼らの懇願に屈し、彼らのいうことを聞いてしまうかもしれない。」そのときフェオドルは自らの精神的な師父の教誨を思い出して、こう言った。「ミハイル殿、あなたは私たちの洗礼父の教えを覚えておられるか。師父は福音書によって私たちに教え導かれた。主は仰せである。『自らの魂を救おうとする者は魂を滅ぼし、私のために自らの魂を滅ぼそうとする者は魂が救われる。』そして、さらに主はこう言われている。『もしも人がこの世の王国を得て、自らの魂を滅ぼしてしまうならば、何のよいことがあるというのか。そして、人は自らの魂のかわりに何を徳するというのか。私を敬い、私の言葉を身のうちに留め、私を信じると人々のまえで告白する者は、私が私の天の父のまえで認めてあげよう。人々のまえで私を知らないという者のことは、私は天の父のまえで知らないというだろう。』」

フェオドルがミハイルにこう言ったとき、ボリスと貴族たちはさらにしつこくミハイルを説得しはじめ、彼に自分たちの言うことにしたがうよう頼んだ。ミハイルは彼らに答えた。「私はあなたがたに耳を傾けまい、私の魂を破滅させまい。」こう言いおわると、ミハイルは自らの公のマントをわが身から剥ぎとり、それを足もとに抛りなげて言った。「この世の榮譽を受けるがよい。それがおまえたちの欲しがらるものだ。」エルデガは、人々がミハイルを説得することができなかつたのを知ると、皇帝のところに行って彼にミハイルの言葉を伝えた。

この場所には、たくさんのキリスト教徒たちと異教徒たちがいて、ミハイルが皇帝に何と答えたかを聞いていた。そのとき、ミハイルとフェオドルは自らのために祈禱歌を歌いはじめ、それを歌いを終わると、彼らの師父がふたりのためにあたえた聖体礼儀を受けた。すると、そばにいた者たちがふたりに言った。「ミハイルよ、皇帝から刺客たちがそなたたち二人を殺すために送られた。叩拝し、生きてください。」ミハイルとフェオドルは異口同音にこう答えた。「私たち二人は叩拝しない。この世の榮譽のためにあなたがたの言うことを聞くことはしない。」そして、歌いはじめた。「主よ、あなたの殉教者たちはあなたに背くことはありません。キリストよ、あなたのために受難を負うでしょう。」このようなこととその他のことを歌った。

そのとき、刺客たちが到着し、馬から跳びおりると、ミハイルを捕まえ、彼に手を伸ばすと、拳でその心臓を打ちはじめた。そのあと、彼を地面に投げつけると、足で彼を踏みつけた。長いあいだこうしつづけた。かつてキリスト教徒であったが、その後キリスト教の信仰に背き異教徒になった掟やぶりの裏切り者で、その名をドマンという者が、聖なる殉教者ミハイルの首を斬り、それをそのあたりに打ち捨てた。

そのあとに人々はフェオドルに言った。「おまえは私たちの神々に叩拝せよ。そして、自らの公の公国を継承するがよい。」すると、フェオドルは彼らに言った。「私は公国はほしくないし、お前たちの神を拝むこともない。私は私の公のようにキリストのために受難を背負いたい。」そうすると、こんどはミハイルにしたのと同じように、フェオドルのことを苛みはじめた。このあと、彼の敬虔なる首が斬られた。

そして、二人はこのように神に感謝を捧げながら殉教し、自らの聖なる魂を神の御手に手渡した。二人の聖なる遺骸は犬どもが喰らうように打ち捨てられた。何日も放置されたが、神の恩寵により損なわれることなく守られた。

人間を愛する慈悲深い主なる神は、聖なる二人の自らのお気に入りの者たちを讃えた。なぜなら、彼らは神と正教の信仰のために受難を負うたからである。ふたりの

遺骸のうえに、地から空に達する炎の柱が現われ、まばゆいばかりの光で輝き、キリスト教徒たちの心を堅固にし、神を見捨て、人間によって創られたものを崇拜する者たちを難詰し、異教徒どもを怯えさせた。ふたりの聖なる敬虔なる遺骸は、神を畏怖するキリスト教徒たちの手で守られた。

二人の殺害が行われたのは6753 (1245) 年9月20日であった。彼らの祈りによって、私たちはみなこの世でも来世でも神の慈悲を見出し、主イエス・キリストから罪の許しを得るのである。私たちは、今もつねに永遠に父と子と聖霊をいっしょに讃える。アーメン。

結び

本稿において、モンゴル・タタールのくびきもつとも厳しかった時代 (1238-1328年) にその核が書かれたと考えられる4つの作品、『ウラジーミルのセラピオンの説教』、『スモレンスクのメルクリイに関する話』、『キーテジに関する伝説』、『チェルニーゴフ公ミハイルとその貴族フェオドルのハーン宮廷における殺害についての物語』を解題とともに訳出し、日本の読者に紹介した。

じっさいにテキストにあたると、モンゴル・タタールのくびきに中世ロシア人が何をどう感じたのかを味わっていただけたであろうか。冒頭に記したとおり、中世ロシア人にとって、騎馬民族の来寇は自らの罪深さに対して神があたえた懲罰にほかならなかつた。中世ロシア人は自らの罪深さのゆえに、神はこれを悔い改めさせるため騎馬民族を来寇させたのだと考えた。ここで挙げた4つの作品群から、こうした中世ロシア人の精神の動きが伝わってこないであろうか。

注

- 1 キエフ府主教キリル3世がおこなった教会改革については、「中世ロシアの異教信仰ロードとロジャニツァ 日本語増補改訂版 (前編 資料)」(『電気通信大学紀要』第17巻、通巻33号) 78-80頁、「3.1.教会法典文書、教誨文書、異教糾弾文書の成立をめぐる歴史的背景について」に素描がある。この記述は、Голубинский Н.М. История русской церкви. М., 1900. Т.2. Ч.1. С.62-81. に拠っている。そのほかにも、ウラジーミルのセラピオンがこの教会改革に深く関与したことに関しては、Русский биографический словарь. Издан под наблюдением представителя Императорского Русского Исторического Общества А.А.Половцова, СПб., 1897のКирилл IIの項を参照。
- 2 ПЛДР XIII в. М., 1981. С.440-455, С.606-610; БЛДР Т.5. XIII в. СПб., 1997. С.370-385, С.518-520. テキストの翻刻、現代ロシア語訳、注釈はB. B. コーレソフによる。このテキストはつぎの写本に拠っている。1. 『金の鎖』 Ф.304, I, №11. (国立公共図書館=ロシア国民図

- 書館蔵、14世紀)、2. 『パイーシイ文集』(1412年ころ、ロシア国民図書館)、3. キリル・ペロゼルスキイ修道院所蔵写本集成297/1081. テクストの異同は、いくつかのロシアの『イズマラグド』写本(14世紀、ロシア国民図書館Φ.256, №186; 15世紀、ロシア国民図書館Q. I. 312)との対照にもとづいている。
- 3 Полное собрание русских летописей (ПСРЛ)と略称). Т.7. Летопись по воскресенскому списку. М., 2001. С.172.
- 4 ПСРЛ. Т.3. Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. М., 2000. С.69. С.275.
- 5 ПСРЛ. Т.6. Вып.1. Софийская первая летопись старшего извода. М., 2000. С.285.
- 6 ПСРЛ. Т.7. Летопись по воскресенскому списку. М., 2001. С.136.
- 7 ПСРЛ. Т.10. Летописный сборник, именуемый патриаршей или Никоновской летописью. М., 2000. С.99.
- 8 ПСРЛ. Т.16. Летописный сборник, именуемый летописью Аврамки. М., 2000. С.50.
- 9 『ルカによる福音書』21・10。「民は民に、国は国に敵対して立ち上がる。そして、大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい現象や著しい徴が天に現われる。…」『マタイによる福音書』24・7。「…民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に飢饉や地震が起こる。…」
- 10 1206年2月28日に日食があり、1207年2月3日に月食があり、1223年と1230年に彗星が現れた。
- 11 1230年5月3日に地震があり、ことにキエフは壊滅的な打撃を受けた。
- 12 ルーシで盛んに読まれていた教父たちのこと。それぞれの生没年は以下のとおり。大ワシレウス(329-378)、神学者グレゴリオス(328-390)、金口イオアネス(347-407)。
- 13 年代記によれば、ルーシの地は1230年ころ飢饉と疫病に襲われた。また、「多くの戦」という箇所では、モンゴル・タタール軍との最初の衝突(1223年、カルカ河畔の戦い)や南方の隣人ポーロヴェツ人たちとの絶え間ない戦闘が念頭に置かれている。
- 14 『マラキ書』3・7。この場合、「主」とは、「万軍のヤハウェ」をさす(旧約聖書翻訳委員会訳『12小預言書』岩波書店、1999年、P.319)。マラキは小預言者の一人で、第2神殿完成(紀元前515年)からエズラ、ネヘミヤの改革(紀元前5世紀なかば)にかけての時代に生きた。下層階級に押しやられた民の現実を直視し、裕福な者たちによる寡婦や孤児、寄留者、日雇い労働者に対する圧迫を非難し、祭司階級の墮落を厳しい言葉で攻撃した(『12小預言書』P.381-382)。この言葉の後半部分は、聖書からの引用ではなく、セラピオンの創作である。
- 15 『ヨハネによる福音書』15・22。
- 16 『マタイによる福音書』25・14タラントンのたとえ。主人は僕たちにお金(タラントン)を預けて旅に出た。僕たちはその金を運用して利益を上げたが、そのなかの一人は穴を掘ってお金を埋めておいた。この僕は帰ってきた主人によって厳しい咎めを受けた。主人は言った。「この役に立たない僕を暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」
- 17 ここでは、モンゴル・タタールの来寇がおおよそ40年前のこととされている。コーレスフはこの一節からこの説教が1275年に書かれたと考えている。
- 18 アッシリアの首都。センナヘリブ王が紀元前700年ころ建設してのち、紀元前612年の滅亡まで存続した。旧約聖書『ヨナ書』によれば、12万人以上の人が住み、行きめぐるのに3日を要するほど巨大な町であった。
- 19 ソドムとゴモラは、旧約聖書『創世記』の伝説的な町。ヨルダンの低地にあったが、その罪悪のために天から降る硫黄と火とで焼き滅ぼされた(『創世記』19)。
- 20 旧約聖書『ヨナ書』に現れる預言者。ヨナは神の命を受けてニネヴェの町の破滅を預言するが、これを聞いた王以下のニネヴェの住民たちが悔い改めたため、神に許された。預言が成就しなかったことにヨナは不満をもった。セラピオンはこれを想像力豊かに再構成している。「赤ん坊がミルクを飲まなかった」以下のディテールは、セラピオンが創造したものである。
- 21 『詩篇』2・12
- 22 『マタイによる福音書』7・2、『マルコによる福音書』4・24、『ルカによる福音書』6・38。
- 23 ローマ・カトリックを奉じている国々。具体的には、ドイツ、スウェーデン、ポーランドなどをさすと考えられる。
- 24 コーレスフによれば、ルーシの年代記も、西スラヴの年代記も1271年から1273年にかけて凶作がづついと伝えている。
- 25 ダビデ王は蜂起したエルサレムの住民を何度か殲滅している。
- 26 ここで言及されているのは、洪水以前にこの地上で暮らし、人間の娘たちと結婚したとされる「巨人」で、ルーシで古くから知られていた聖書外典(たとえば、『義人エノクの書』)や翻訳された年代記(たとえば、9世紀に編纂されたイオアネス・マララス)に現われる。巨人たちは人間に今も残る欠陥を広め、そのために神は巨人たちを炎で罰した。
- 27 『出エジプト記』23・28「わたしは恐怖をあなたの前に送り、ヒビ人、カナン人、ヘト人をあなたの前から追い払う。」この部分で、「恐怖(原語でツィルアー)」は、スズメバチと解されることがある。『申命記』7・20、『ヨシュア記』24・12でも同様の文脈でこの語が用いられる(旧約聖書翻訳委員会訳『出エジプト記 レビ記』岩波書店、2004年、P.113)。
- 28 ティトゥスはローマ皇帝(在位79-81)。ヴェスパシアヌス帝の長子で、父からユダヤ戦争の全権を託され、70年にエルサレムを陥落させた。
- 29 セラピオンは「説教V」で聖書のエピソードから、神が人々にあたえた懲罰を数え上げている。151頁参照。ここで言及された事件のいくつか、たとえば、ティトゥスによるエルサレム征服は、11世紀に翻訳されたフラヴィウス・ヨセフスの著作などの世俗文学をとおして、中世ロシアの文筆家が知っていたものである。
- 30 注26参照。
- 31 注28参照。
- 32 セラピオンはこの箇所です殺者に関する俗信について述べている。自殺者たちはふつうのやり方で埋葬してはならなかった。なぜなら、こうした不幸な死を遂げた死者たちをふつうのやり方で埋葬すると、凶作、疫病、飢饉が起こると考えられたからである。ロシアの民俗学者ゼ

- レーニン、村のはずれの沼地などに放置されるこうした死者を「残置された死者 Заложный покойник」と呼んだ(Зеленин Д.К. Восточнославянская этнография. М., 1991. С.352-353)。セラピオンはこの箇所、19世紀まで根強く保持されていた俗信と戦っている。
- 33 ドウラツツォはアドリア海東岸の町。1273年の地震で倒壊した。
- 34 ПЛДР XIII в. М., 1981. С.204-209, С.560-561; БЛДР Т.5. XIII в. СПб., 1997. С.164-167, С.480. テクストの翻刻、現代ロシア語訳、注釈はЛ.А.ドミートリエフによる。このテキストは、ロシア歴史博物館蔵の写本、宗務院蔵書908番に基づいている。この写本のテキストを最初に刊行したのは、Л.Т.ベレツキイである(Берецкий Л.Т. Литературная история «Повести о Меркурии Смоленском». Исследование и тексты. Пгр., 1922. С.55-57.)。
- 35 ПСРЛ. Т.9. Летописный сборник, именуемый патриаршей или Никоновской летописью. М., 2000. С.177-178.
- 36 Библиотека русского фольклора. Былины. М., 1988. С.279-284, С.540-541; Пропп В.Я. Русский героический эпос. Л., 1955. С.374-384. 英雄の名のスフマンチイ(スフマン)も、父称のオジフマンチエヴィチ(ドマンチエヴィチ)もチュルク語系の人名である。この英雄譚は、ポーロヴェツ人の侵略を阻むために、ルーシ諸公がチュルク系諸部族の兵士たちを傭兵としてもちいた12世紀の現実が反映されていると考えられている。
- 37 拙著『ロシアの源流』(講談社メチエ叢書、2003年)第2章「トヴェーリ公ミハイルの野望」参照。
トヴェーリ公ミハイルの英雄的相貌を『ニコン年代記』1298年の項は、次のように描いている。
「トヴェーリ大公ミハイル・ヤロスラヴィチの屋敷から火が出て、ミハイル・ヤロスラヴィチの屋敷が焼けた。神の慈悲によってミハイル公本人が目覚まし、后妃を連れて窓から飛び出した。公の子どもも貴族たちも多く、見張りも眠っていて、誰も火事の気配を聞かなかった。」
モスクワ寄りの立場で書かれた『ニコン年代記』はトヴェーリに対して必ずしも好意的ではないが、トヴェーリ公ミハイルが危機に際して敏速勇敢に行動したことに注意が払われている。
- 38 スモレンスクはノヴゴロドと同じように、住民の行政単位は区(コネツ)と百人区(ソトニヤ)に分かれており、百人区には商人が住んでいた。
ペトロフスコエ百人区はドニエプル川右岸、市の政治的中心の対岸の低地帯にあり、そこにあるペトロ・パヴロ教会にちなんでペトロフスコエ百人区と呼ばれていた。
- 39 チンギスハーンの子孫の次男で、1237-1238年の沿ヴォルガ遠征にはじまる西方へ侵寇をくわだて、1241年にはリーグニツの戦いでヨーロッパ連合軍を破った。
- 40 中世ロシアにおける距離の単位。1ポプリシチェは1ヴェルスタとほぼ同じで、1066メートル。
- 41 1101年にウラジーミル・モノマフによって竣工されたウスペンスキイ(聖母就寝)聖堂を指すと考えられる。この聖堂のなかに、ウラジーミル・モノマフによってキエフからスモレンスクにもたらされたオジギトリア(旅の標)型の聖母イコンが安置されていた。1398年にこのイ
コンはモスクワに持ちだされ、1456年にスモレンスクに返された。17世紀はじめ、スモレンスクは2年にわたりポーランド軍に包囲され、1611年に占領された。ウスペンスキイ聖堂は地下室が火薬の保管庫として使われていたが、そのさい、スモレンスクの住人によって爆破された。
42 おそらくスモレンスクにキエフのそれをまねた洞窟修道院があったのであろう。この洞窟修道院は、スモレンスクから8キロのところにあるペチョラ(洞窟)という名の村にその痕跡を残している。
43 バトゥは1241年、ハンガリーに攻め入り、サイオ川の戦いでハンガリー王ベラ4世の率いる6万の軍勢を打ち破ってハンガリーを支配下に置いた。ハンガリーは以後モンゴル・タタールのくびきを経験することになる。ハンガリーでバトゥが殺されたというこの部分の記述は伝説においてよくある虚構で、ルーシでは15世紀に広がりを見せたいらしい。実際のバトゥはハンガリー攻略中、オゴタイ・ハーンの死の報せを受けて1242年に引き返した。
44 モロギンスキイ門という名前の門は、スモレンスクでは知られていない。モロホフスキイ門のことを指している可能性は十分にある。この門は、モロホフ郷、さらにムスチスラヴリに通ずる街道の出発点である。
45 伝説によれば、メルクリイの柩は聖母就寝聖堂のなかにあった。
46 ПЛДР XIII в. М., 1981. С.210-217, С.561-563; БЛДР Т.5. XIII в. СПб., 1997. С.168-183, С.481-482. テクストの翻刻、現代ロシア語訳、注釈はН.В.ボヌイルコによる。このテキストはГПБ.(現РНБ.ロシア国民図書館)Q.1.1385という写本に基づいている。В.Л.コマローヴィチはその著書『キーテジ伝説 さまざまな土地の伝説の研究の試み』(モスクワレニングラード、1936年)において、この写本にもとづいてテキストの翻刻をおこなった(Комарович В.Л. Китежская легенда. Опыт изучения местных легенд. М.-Л. 1936. РР.158-173)。
47 ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチ(1187年くらい-1238年)はウラジーミル大公。ウラジーミル大公フセヴォロド・ユーリエヴィチ大巢公の子、ユーリイ・ドルゴルキーの孫。
48 フセヴォロド=ガヴリール・ムスチスラヴィチという公は、1117年からノヴゴロド公位にあったが、1136年に追放され、プスコフ公に招聘され、1137年か1138年に死んだ。
49 ムスチスラフ(1076-1132)はウラジーミル・モノマフの長子で、キエフ大公。
50 ウラジーミル・スヴァトスラヴィチ大公のもとで、キエフ・ルーシはキリスト教を受容した。「使徒にならびたつ」というのは、ウラジーミルのキリスト教受容を讃える形容句。
51 ヤロ波尔ク・ウラジーミロヴィチ(1082-1139)は、ウラジーミル・モノマフの息子でキエフ大公(在位1132-1139年)。ノヴゴロド公フセヴォロド・ガヴリールの叔父にあたる。
52 ミハイル・フセヴォロドヴィチは、ゲオルギイ・フセヴォロドヴィチの妻の兄弟である。
53 アンドレイ・ユーリエヴィチ・ボゴリュブスキイ(1111年ころ-1174年)はユーリイ・ドルゴルキーの子で、スーズダリ・ウラジーミルの大公。

- 54 レオンチイはロストフ主教で、ロストフ公国の住人をキリスト教に改宗させるのに功があった。1077年ころ没。
- 55 ロシアの長さの単位。1サージェンは3アルシン、2.134メートル。
- 56 ドミートリイ・ロストフスキイの『曆聖者伝 (チェーチヤ・ミネヤ)』によれば、5月1日はイエレミアのほか、パフヌーチイ・ポロフスキイ、殉教者ヴァータの日にあたる (Жития святых, на русском языке изложенные по руководству четьих-миней св. Дмитрия Ростовскаго. Книга девятая. М., 1908)。
- 57 注40参照。
- 58 聖者列伝はПатерикの訳語である。聖者列伝とは、修道士たちに関する短い物語や修道士たちの訓話を集めた文集である。ここで名前が挙げられた聖者列伝は、『モナーシイ聖者列伝』を除いてすべて現存する。『モナーシイ聖者列伝』は『シナイ聖者列伝』が誤って伝えられたものかもしれない。
- 59 シナイのアナスタシオスは6世紀アンティオキアの総主教で、キリスト教作家。
- 60 新しいイラリオン、あるいは、ベレキトのイラリオンと呼ばれる、8世紀のキリスト教作家。
- 61 『チェルニーゴフ公ミハイル殺害についての物語』、『スモレンスクのメルクリイに関する話』は本稿に掲載されている中世ロシアの説話。ただし、ここで書かれている事件の年代順は根本的に間違っている。
- 62 ミハイル・フセヴォロドヴィチ (1180/1190-1246) は、フセヴォロド・スヴャトスラヴィチ・チェルムヌイの子で、1224年から1234年にかけてチェルニーゴフ大公となった。ノヴゴロド公位についたことも数回あった。キエフ大公位をめぐる争っていた。バトゥの来寇のさいには、ハンガリーに逃げたが、ルーシに帰還後、ハーン国に赴き、そこで殺された。
- 63 ПЛДР XIII в. М., 1981. С.228-235, С.563-564; БЛДР Т.5. XIII в. СПб., 1997. С.168-183, С.481-482. テクストの翻刻、現代ロシア語訳、注釈はО.П. リハチョーヴァによる。このテキストはロシア国民図書館 РНБ所蔵ソフィア写本集成1365番、192-195葉裏に拠っている。
- 64 このアンドレイが何者であるかは不明である。ミハイル公とともにハーン国宮廷に赴き、公の死の現場に立ち会った人物だと考える研究者もいれば、アンドレイが直接の目撃者から証言をえてこの物語を書いたと考える研究者もいる。
- 65 1243年に東欧遠征から帰ったのち、バトゥはヴォルガ川下流域に根拠を定め、モンゴル・タタール国家、いわゆる金帳汗国 (ゾロタヤ・オルダ) を創建した。ヴォルガの東岸、現在のアストラハン付近に建設された金帳汗国の首都、古サライはバトゥの名前にちなんでバトゥ・サライとも呼ばれている。事件はここで起こった。
- 66 ここに描き出されているモンゴル・タタール人たちの「異教的」風習は、モンゴル・タタール人のものというよりもルーシ人自身自身の異教的風習である。

16世紀イワン雷帝によって召集された百章会議決議93章「同じく異教的な気違い沙汰や魔術や妖術についての回答」には、次のような一節がある。

「月によってはその初めに、一部の者たちがその仕事場の前や家の前で火を焚いて、何らかの古代の風習にしたがってこれを飛び越えているが、今後はこのようなこ

とを止めるように余は命ずる。」「ある者たちは者を売り買いする建物の前や自分の家の門前で、何らかの古代の風習にしたがって火を焚き、その火を飛び越えている。このような行為を根絶するため、教父たちは命じている。」(『百章』試訳(3))、一橋大学研究年報人文科学研究31、1994年、81頁)

モンゴル・タタールのくびきに苦しんだルーシ人たちの一部には、かかる苦患は自らの罪深い行いのために神がくだされた罰だという認識があった。キエフ府主教キリル3世 (在位1249-1281年) は、ウラジーミルのセラピオンとともに、そうした認識をもった正教会関係者の代表である。彼らは、神の怒りの対象はルーシの民の異教的風習であると考え、その根絶を訴えた。

ミハイルが命にかけても拒絶したのがじつはルーシ人自身の異教的風習であったことは、この物語が執筆された当時の正教会の思潮を反映していて興味深い。

- 67 教会から受ける罰はエビチェミヤепитемьяと呼ばれる。この教会の罰の内容は、齋戒、地に伏しての叩拝、聖地巡礼などであった。基本的には教会によって課されるが、まれには悔い改めによって罪のあがないをするため、自らが自らに課す場合もあった。

参考文献 (テキストと注釈)

- Памятники литературы древней Руси XIII в. М., 1981
Библиотека литературы древней Руси Т.5. XIII в. СПб., 1997.